

HELLVOYAGE～地獄が航海する～

結城朝晴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

市民を守る警官に憧れて警官となり機動部隊のエリート部隊に配属された男はテロリストの凶弾に倒れ、死亡する。

しかし、ワンピースの世界に転生し前世の市民を守る意志を抱え、強力な悪魔の実の力で海軍、海賊どちらでもない存在として民衆を守りながら生きていくお話。

目次

大航海時代（原作前）

真の吸血鬼	1
02話 別れと新しい日々	8
03話 出港	15
04話 シャボンデイ諸島	22
05話 第二回奴隷解放大会①	29
06話 第二回奴隷解放大会②	36
07話 棚からぼた餅	42
08話 水の都	49
09話 布石	56
10話 アラバスタ内乱への布石	62
11話 思い立ったが吉日	69
12話 鬼ヶ島	76
13話 不平等条約	83

大航海時代（原作前） 真の吸血鬼

この世には民衆を襲い平和を奪い、命を奪い、財産を奪う海賊がいる。

この世には民衆を抑圧し自由を奪い、命を奪い、財産を奪う国家がある。

この世には民衆を見下し平穏を奪い、命を奪い、奴隷にする階級が存在する。

この世には民衆を守らず、賊に協力し甘い汁を吸う軍隊が存在する。

私はそれらを許さない。たとえ世界が敵になろうとも私はそれらに罰を与える。この世から抹消する。それが私の使命だ。

私はもともと警官だったはずだ。市民を犯罪者から守り、安心と平穏を与える警官に憧れて警官になったんだ。それから必死に勉強や訓練を行って機動部隊でもエリート部隊に配属してもらってた。

そうだ、そうなんだ。全ては市民のために、安全と平穏を守るために頑張ったんだ。

そして私はテロで死んだ。人質をとったテロリストたちの鎮圧の最中にテロリストの凶弾に倒れてしまった……。

しかし、どうだろうか。私は生前、輪廻転生や天国や地獄、神の存在なんてほとんど信じていなかった。

だが、私は女に性別を変え転生した。してしまった。私が趣味で読んでいた小説や見ていたアニメのようなことが私の身に起きた。最初は当然驚いた。死んでしまったと思ったら、見知らぬ女性に抱かれ私は泣き叫んでいたのだからこれで驚かない者がいたら相当な肝を持っていろいろだろう。

それから、少しずつ成長しながら現状を理解して慣れていった。
10歳になった今、この世界があるのかあの世界規模で大人気の漫画『ワンピース』の世界だと気付いた。このときばかりは転生したとき並に驚いた。第二の故郷となったこの港町はグランドライ
ン後半の海新世界にある小さな島らしい。

ワンピースの世界だと気付いた理由はこの港町に寄港してきた青い軍艦のマストに描かれたカモメのマーク。こんな船はワンピースに登場する海軍のものしか存在しないだろう。

海賊から市民を守る海軍。この世界がワンピースの世界と分かた
たらやっぱり海軍に入りたい。せつかくのワンピース世界、海賊をや
るのが王道なんだろうが前世と同じ結果になろうとも市民を守りた
い。

港に行ってみるとは3隻もの軍艦が寄港してきた。なんだか軍艦
はボロボロでこの村に来る前に海賊と戦闘でもしたんだろうか。

軍艦から降りてきた将校と町長がなにやら会話をしていた。なに
やら町長は困ったようだが……。将校は顔が真っ赤になるレベルで
怒り出した。どんな会話をしているんだ……。

え……。市民を守るべき海軍がそれも将校が町長を斬りつけた
……。？

「お前ら、この町は我々海軍に補給をさせない悪人たちの町だ！正義
の名のもとに全て徴収してしまえ！」

「二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！！」

軍艦から何十、何百もの海兵が降りてくる。彼らの手にはサーベル
やマスケット銃をが握られ、守るべき市民にそれらを使っている。

私は何を考えていたのだろうか。この世界はワンピースの世界だ。
海軍にも一定数の屑がいることは分かっていたはずだ。前世でも一
定数犯罪に走る警官はいたがこの世界レベルの奴らはいなかった。

新世界という凶悪な海賊が多い中で守ってくれるはずのヒーロー
が敵になるなんて市民に一体どれだけの絶望を与えるだろうか。

私は海軍に『失望』しながら急いで港から走った。たかが10歳
の少女、武器を持った成人男性に勝てるわけがない。

そして逃げながらも私は誓った。もし生き残れたら海軍でも海賊でもない、市民を民衆を守る存在になると。

故郷は小さな島で逃げるには海に出るしかない。自宅に戻ればお母さんとお父さんはいなかった。どうか、逃げ延びることができているよう願うしかできることはない。

バッグに逃げるのに必要な物を詰め込み、裏口からだと裏庭に生えていたザクロの木に禍々しい果実が実っているのが目に入った。すぐにそれが『悪魔の実』だと分かった。どんな能力なのか分からないし見た目もヤバそうなのこの果実を私はもぎ取り、口に入れながらフェンスを乗り越え走った。

なぜか、食べないといけないと思った。

なぜか、市民を守るには食べないといけないと思った。

納豆に醤油の代わりにコーラを入れ、石鹼を混ぜ、鉄にかけたような味が口いっぱいに広がり吐き出しそうになるがなんとか飲み込む。

飲み込むと同時に視界が真っ赤に染まる。

「カハッ！ハアハア……うづウ……」

呼吸ができない。

「ヘアガ！」

足が乾いた水のように崩れる。

「――」

体が影になる。

「お前ら、こつち来い！上玉の女がいるぞ！」

やめろ

「いやああああ！来ないで！」

「へへっ。そんなに逃げなくてもいいじゃねえか。おい、足を狙って撃て。殺すんじゃないぞ」

やめろ

「俺らにも後で貸してくださいね？軍曹」

やめろ

「おうよ、構えろ！………てえ！」

『辞めろって言ってるだろうがあー!』

影は実体となりスタイルのいい女型になる。女型とは別の黒い影が逃げる女性の背中を守るように駆け抜け、銃弾よりも早く女性に到達し影が銃弾を弾き返した。

海兵たちは現実離れた光景に気を取られ足元によってきた影に気付かず、影によって串刺しにされた。

「これが悪魔の実の力……」

感覚的に何ができるのかわかる。決して人間が勝てない化け物の力があの悪魔の実によって私に与えられたのだ。

「日光がウザい……この能力ちからから思うに吸血鬼にでもなったのか」

「その割には日光も流水も嫌悪感を感じるだけで特に体にダメージもない。ただ……血が美味そうに感じるのは倫理的になんか嫌だな」

そう思いながらも私は串刺しにされた海兵の血を啜る。今まで食べてきた物のなかでもトップクラスで美味しい。

しかし、傍から見れば黒いものに串刺しになった海兵が真っ黒の女型の化け物に捕食されているように見えるだろう。

「ああ……ああー!」

そんな吸血シーンを見てしまった海兵さん。SAN値チエックです。SAN値チエックをする前にその海兵も串刺してしまった。血が影に垂れ4体の串刺し死体の血液が影を辿るように私に向かって伸びてくる。血液は私の体に触れると体に吸収されていく。

とある漫画でこんなセリフがあったな……

『血とは 魂の通貨 命の貨幣』

命の取り引きの媒介物に過ぎない

血を吸う事は命の全存在を自らのものとするのだ』

なら、その漫画の吸血鬼のようになれるのではないか。あの化け物に、人間でいられなかつた弱い化け物に。

奇しくもこの悪魔の実の能力は化け物彼らの能力とほとんど変わらな
い。なら私もヘルメスの鳥となり自らの羽根を喰らい飼ひ慣らされよう。全ては民衆のために。

「その化け物!化け物の割にはいい体してるじゃねえか。お前ら、

あいつをやれ」

大勢の海兵が私に銃口を向けてくる。化け物にすら劣情を抱くのかこいつらは。胸糞悪い奴らだ。

「串刺し公の槍」
ツェペシュ・ランサー

自分の影が一斉に海兵の影に混ざり、今までの海兵同様串刺しになる。視界に入った海兵は全員串刺しにされ、人の後ろで見えていなかった者だけが生き残る。

「お、お前ら……？」

戦友が一斉に殺され何をされたか理解できていないうちに地面を蹴り飛ばし急接近してその勢いで頭をもぐ。頭がなくなった体は力なく倒れ込み、頭部は私によって戦友の元へ渡され戦友の腹にどデカイ穴を開けた。

◆loading……◆

「おいおい、どうなつてんだこりやあ」

「ぶあつはつは!!軍艦が真つ二つにされとるわ!自ら襲つておいてこのざまとはな!」

世界を守る海軍、その中でも指折りの実力者であるクザンと老齡ながらも未だ現役、そして海軍の英雄とまで言われたガープは元帥センゴクに大至急『アラキワ島』に向かえと命令された。

理由も聞かされるず軍艦に乗せられ島に向かって出港してから電伝虫で細かな理由が告げられたのだった。

要約すれば

『G-6の第3支部が反乱を起こして基地に近い島を襲っている』

とのことだった。

これにはガープもクザンもこの重要さを感じ取り最大船速でアラキワ島に向かったのだ。海軍が一般庶民を襲うなんて言語道斷、あつてはならないことなんだから。

海軍本部から最短ルートを最速で向かった先で島を見た2人の感想が先の発言だった。

田舎の小さな島には似つかわしくない軍艦が港で真つ二つ割れて沈没している。

「おい、お前ら周辺に海賊は見えるか！」

「——確認できません！」

「ふむ……。じゃあ海賊の仕業ってわけじゃなさそうじゃな」

「ガープさん、一般人が軍艦を真つ二つにしたって言うんですかい？
冗談きついですよ」

「それもそうじゃが、実際に船はあの状態じゃ……」

「総員、衝撃体勢！島から砲撃です！」

「なっ！」

「ふーむ。クザンお前が対処せい」

「なんで俺が……バルチザン両棘矛！」

砲弾は全て空中で爆破し船に届くことはなかった。

「でガープさんなにか考えてる見たいっすけど何考えていたんですかい？」

「こんな島に大砲なんて置いてあるはずがないんじやがどうやって砲弾を撃ったのお」

『全ては民衆のために』

「!？」

声が聞こえた後ろを瞬時に見れば、そこにはまだ15歳にもならないような黒髪ロングの少女が立っていた。海軍の制服のような純白で統一された毛皮の帽子にマフラー、スーツ、コートと子供らしからぬ格好でその真紅の瞳が異彩を放っていた。

「……お嬢さんどうやってこの軍艦に乗ってきたんだい？」

クザンが優しく彼女彼に尋ねる。

「貴様らは生きる価値がある」

「え？」

想像してた斜め上の返答にクザンは呆気にとられた返答しか出せなかった。

「あの船を真つ二つにしたのはオヌシじゃろ？」

「あの島にいる海兵は全員殺した。住民はもう海軍を信用していな

い。貴様らが向かってても火に油を注ぐだけだ。たとえそれが英雄
ガープと海軍大将青キジであっても」

「全員殺した……！」

「軍艦3隻の乗組員全員を！2400人全員をか！」

周りにいた海兵も、彼女^彼の発言に動揺する。この小さな少女が訓練
された大人を皆殺しにしたなんて信じられるわけなかった。

「わっはっはっ全員死んだか、ならいい。じゃが、奴らは海賊^{肩ども}もと手
を組もうとした奴らじゃが元は海軍じゃ、せめて謝罪くらいはさせて
はくれんかの？」

「……どんな目で見られるかは分かっているのだろうか」

「ああ、分かつとる」

「なら来い」

そうすると彼女^彼は影に沈んでいき影は船を海を渡って島へ向かっ
ていった。

主人公が食べた悪魔の実

名前【ヒトヒトの実】

分類【ゾオン系幻獣種】

モデル【真祖^{アー}の吸血鬼^{カド}】

02話 別れと新しい日々

海軍は島につくと何も持たないで上陸した。町人たちに敵意がないことを示すためのパフォーマンスみたいなのだろう。

さっきの海兵たちとあからさまに雰囲気が違う海兵たちと、あの英雄ガープと海軍大将青キジのコンビが来たことで市民たちは反応は比較的マシだ。これがどこの誰かも知らない支部の人間なら市民たちは銃火器を向けていただろう。

それでも海兵たちは普段向けられる視線とは違う憎しみの視線に固唾を呑んでいた。

町民に前方を囲まれる形でガープたちは立ち止まった。海兵の先頭は海軍本部中将ゲンコツのガープ。対するは私だ。ワンピース特有の現実ではありえない巨体に少し驚いたが、それ以前に主人公の祖父であるガープと漫画を代表する強キャラである青キジに会えていることに歓喜してしまっている。

「この度は……」

おっとガープ、町の光景を見て少し涙目になりながら一歩前に出て膝をついたぞ。青キジもその他の海兵も膝をつき始めて……これ、ドレスローザで見たやつだ！

「本当に申し訳ないっ！ワシら海軍は市民を守るのが務め！それなりに守るべき市民を恐怖のどん底に突き落としてしもうた！」

漫画を読んでいると時々感じられる人徳者の面が全面に出ているな。いやあドレスローザ編で藤虎が土下座したシーンは読んでいただけで驚いたけど実際にされると比べ物にならない衝撃を受けるな。

「そ、そんなガープ中将にクザン大将まで……顔を上げてください！あなた方はあいつらとは違うでしょう！」

さすがの行為に町民も思わず声をかけてしまっている。

「いや、奴らも海兵。直接の部下じゃあないが海軍という組織の一員だったんじや。組織の末端の不祥事だろうが上のモンが頭を下げるちゆうのは当たり前じゃ」

「……………」

町民のみんなは言葉を失ってしまっているな。クソつたれな海軍を見て体験したあとに正常であらべき姿の海軍を見て一気に湧いた海軍への憎悪が収まってきているのがわかる。

「今回の件は本部も重く見ている。復興の資金も資材も海軍が全て負担するよう相談しよう。いや、負担させる」

ガープに変わって今度は青キジが土下座の姿勢で顔だけ上げて話し始めた。ガープは謝罪、青キジは今後の補償についてか。いい役割分担だな。

「私はまだ海軍のことを信用し直せません……でも、あなた方は奴らとは違う。だから、どうか土下座をやめてください」

人集りから出てきたのは町長の息子だった。最初に斬りつけられた町長はそのまま息絶えてしまったが、息子はしっかり生き延びることができていたのか。

ガープと青キジは町長の息子の言葉にお互いで目配せをしてから立ち上がった。後ろの海兵たちも立ち上がり、町民の視線を正面から受けている。

「ガープ中将、どうか我々のような思いをする人がこれから現れないよう掛け合ってくださいませんか？」

そう言いながら町長の息子は手を前に出す。その手に応じるように手を握り言葉を紡ぐ。

「勿論じゃー」

こうして騒動は収まった。

しかし、事後処理が始まる。事後処理は町民にとって辛い現実を再認識させた。

第3支部の襲撃によって町は燃やされ、多くの人が殺された。ガープたちが来る前に町の火は消火されたが死体はそのままだった。

まずは海軍とともに遺体の回収と埋葬が行われた。その際、私がやった森と見間違える量の串刺し死体が発見されゴタゴタが起きたが適当に流して遺体を埋葬した。町民は町の共同墓地へ、第3支部員は海に投げ捨てられた。

この際に知ってしまったが、私の家族は全員殺されてしまってい

た。父親は鈍器を持ちながら銃弾で胸を撃ち抜かれ、母親は首を絞められて殺されていた。それも母親は海兵に犯されながらだ。母親のそばには頭から血を流した半裸の海兵の死体があり、父親が母親を助けようと海兵を殺したのだろう。

なんとも胸くそ悪い話だ。

「なあ嬢ちゃん」

「なんですか」

「嬢ちゃんは海軍が憎いか。父ちゃんと母ちゃんにこんなことをした海軍が」

「憎くないといえば嘘になりますが敵は討ち取りました。だから今は無関心といった具合です」

「そうか……嬢ちゃんは悪魔の実の能力者なんだよな、いつからだ？」
「ついさっきですよ。あいつらが襲ってきたとき偶然木になっていた悪魔の実を食べたんです。なぜか、食べないといけない。食べないとみんなを守れないって思ったんです」

「……………」

「私はどうすればいいんでしょう」

海軍でも海賊でもない民衆を守る存在になるという目標はあるが、海に出ようと船も航海術も持ち合わせてない私は八方塞がりになり、ちいいってしまってる。

「嬢ちゃんは海に出たいか？」

「はい」

「なら俺と一緒に海軍に来ないか？」

何言ってるんだこの氷野郎。

こっちは無関心といったが親を海軍だった奴らに犯され殺されるんだぞ。どんな神経してるんだ。

「それは……………」

「勿論、海軍に入れて言うわけじゃない。海軍でその悪魔の実力の使い方と航海術を学びに行くんだ」

だとしてもよ!?

「第3支部のやつらは腐っていたが本部は違う。サカズキっていう行

き過ぎた正義を信条にしてるやつがいるくらい本部は正義を重んじてる」

心情は別として海軍で学ぶのはいいかも知れない。ただ、将来海軍と敵対したときこっちの能力が知られているのは嫌だな。そこを考慮して天秤にかけたら……。

「よろしくお願いします」

「いいのかい？」

「はい。でも、私海軍に入る気ありませんよ？」

「ああ構わない。ゼファー先生なら理解してくれるだろうよ」

ゼファー！先生ということは少なくとも原作開始から2年前以上上ってことか。これで腕が切り落とされていなかったら7年以上前になるな。

「そういえば嬢ちゃん、名前はなんていうんだい？」

「エドワード・アンナ……でもアンナは今日、さっきの戦いで死にました」

「……………」

「今日から私はクルシュ・ジルベールです！」

「よろしくな、ジルベール」

「はい！」

「じゃあとりあえず本部に行く前に基礎体力の特訓で瓦礫を町外れに運ぶぞ」

「はい！」

化け物共がうじゃうじゃいる世界だ。誰だけ能力が凄くても基礎がしっかりしていないとどうしようもない。まずは基礎をしっかりと鍛えていこう。



「本当に行くのかい？アンナちゃん……」

「隣のおばあちゃん……」

ガープたちが島についてから3日目の今日、ガープたちは本部に帰

還するらしい。島には資材や資金を積んだ復興部隊がやってくるらしい。

ガープたちは船に補給物資を搬入させている、一方で私は島を出て海軍本部に行くため、町民のみんなと別れを告げている。

「私はみんなを守る存在になりたいの」

「両親が亡くなって辛いだろうに……。アンナちゃんは強い子なんだね」

「アンナ、これ持ってけ！俺たちからの餞別だ！」

町の男衆がそう言いながら見せてきたのは、クレイモアのような十字のロングソードだった。この世界の剣は基本的にサーベルか日本刀のようなものばかりのなかで西洋的な直剣をチョイスしたのか。

「まだアンナには扱えないと思うけど成長したら使えるようになるはずだ。そしたらこの剣で俺たちを守ってくれ！」

「バカかい！あんた！女の子に守られる男がどこにいるってんだい！このアホ！」

「いでっ！」

近所の夫婦のやり取りは見てて飽きないな。奥さんも旦那さんも仲が悪そうには見えない。どっちかという仲がいいからこそあんなことをしてられるんだろう。いい夫婦だ。

「アンナちゃん！男どもはこんな物騒なものを渡してきたけどアンナちゃんはこんなもの握らず、なるべく安全なところにいなさいよ？」

「そ、それは〜」

「誤魔化し方がアルフレッドみたいだね。あはっはっはっ！」

「「あはっはっはっ！」」

温かい。彼女らも大切な人を失っているというのに私に優しくしてくれる。だからこそこんな人たちが酷い目に合わないように、合っても救い出せるように私は強くならないといけない。

「ジルベール、そろそろ出港だ！船に乗ってくれ！」

海兵の一人が出港を教えてくれる。それは町の人ともう当分会えないことを伝える声でもあった。さつきまで元気そうだった町民のみんなも少し涙目になりなりながらこっちを見てる。

「アンナちゃん怪我しないようにね」

「うんとご飯を食べるんだよ」

「なにか困ったことがあったら手紙でも俺たちによこしな！そしたら俺たちが海軍本部に乗り込んでやるからな！」

「アンナ、元氣出やれよ！」

「はい！皆さん、今までありがとうございます！頑張ってください！」

そう言っただけは軍艦に乗り込んだ。船が動き始めると町民のみんなは棧橋まで追いかけてくれてずっと手を降ってくれている。

『みんな〜！私、絶対民衆を守る存在になるから！全ては民衆のために！』

こうして私は海軍本部に向かっていた。

道中、ニユース・クラーが持ってきた新聞でゴールド・ロジャ^{海 賊 王}の船を作った“トム”が処刑されたことが分かった。つまり、今は原作の8年前ってことか。ゼファー先生もう少しで腕切り落とされるじゃん。

それよりも今が8年前ってことだからエースが海に出るのが5年後、ルフィが出るのが8年後か……。時代が大きく動き始めるのはやっぱりルフィが海に出てからだ。それに合わせて私も動き出すべきか。それともエースと同じ頃に海に出て原作の時代にはある程度名が知れた存在になっておくか。どちらにしろ、まずは特訓で強くないとだな。捕らぬ狸の皮算用ってな。

◆ Loading

海軍本部に着いたあとはガーブと青キジに付いてくるよう言われ、元帥のセンゴクに会った。

そう安々と頭を下げていい立場じゃないはずなのにセンゴクは深々と私に頭を下げてきた。この人も人徳者として描かれていた通りの人だ。

ガーブは私が海軍本部で鍛えてもらいたい旨を伝えセンゴクはそ

れを了承してくれた。海軍には入りたくないことを知ったセンゴクは少しがっかりしたような表情を見せたがすぐ普通の顔に戻り、『力の使い道を間違えるな』と語ってくれた。

ゼファアは映画の回想シーンに出てきた優しさを持った厳しい先生って感じだった。腕もちゃんと残っていて1年後の事件で悲惨な目に合うと思うと少し悲観してしまう。

訓練はゼファア「先生」のもと新兵たちの訓練と一緒にやった。悪魔の実際の能力のおかげで身体能力が化け物じみているお陰で楽々こなせてしまっている。腕立て二千回とかトラック500週とか軽々とこなせてしまうこの体が少し怖くなってくるほどだ、組手も同期では相手にならないし教官である中尉クラスの将校でも一方的な戦いになってしまう。

これが技とかなしで能力の言わば無課金状態でこなせるんだからさすが^{彼ら}彼の能力だ。

正直に言って海軍の訓練は剣術や火器の扱い方の訓練以外必要ない。今度、ガープ「さん」に覇気とか教えてもらおう。

そんな退屈な中でも気付かされることは多くあった。1番の気付きは諦めを知らず、一喜一憂し、前を向き続け、訓練を行う同期たちだ。なんと素晴らしいのだろうか。

友情・努力・勝利、ジャンプの三原則、世の中の男を熱くする言葉を体現しているようだ。彼らは生きる資格を持っている。

03話 出港

海軍本部で特訓をし始めてはや4年。いろんなことがあった。1番の出来事はやっぱり、訓練中に海賊に襲われたことだろうか。

本当ならゼファー先生が腕を切り落とされる事件だったが、私というイレギュラーの存在で被害を最低限に留められゼファー先生の腕も繋がったままになった。歴史を改変してしまったが、ネオ海軍とのゴタゴタで被害を被る市民たちが救われると考えればいいと考えるのが定石だ。

「ジルベール、本当に海軍に入らんのか？」

「今までも何回も言ったでしょうセンゴク元帥、私は海軍とは違う正義を信じて進みますって」

私は今日をもってこの海軍本部から旅立つ。特訓の描写はなしかって？ルフィだって2年間の修行は詳しく描かれてなかっただろ。そういうことだ。

それはそうとマリンスフォードの港には私の出港の見送りでお世話になった人が駆けつけてくれた。

「ジルベール、少しでも道を踏み外してみい、ワシが骨の一欠片も残さず燃やすけえなあ」

「道を踏み外すなんてそんなことしませんよ、サカズキ大将。でも、もし私の正義が海軍とぶつかったときは全力でお相手務めさせていただきますから」

「威勢がいいねえ。でもジルベールちゃんのことだから海軍と敵対するなんてG-6みたいな時でしょうオ。海賊みたいにはならんでしょうよオ」

「そんなことよりよ、ジルベール。あの旗のマークの意味はなんなんだ？」

ボルサリーノ大将の言葉をそんなこと呼ばわりしてクザン大将が質問してきたのは私の後にある船に描かれたマークについてだった。

「釣り合ってる天秤ってのは平等を表してるのは分かるんだが……その周りの枝はなんだ？」

ワンピース世界じゃあオリーブの枝は平和の象徴として認識されていないのか。そもそも平和に程遠い世界だし仕方ないのかもしれない。

「あれはオリーブの枝です。ある土地ではオリーブの枝は平和の象徴として扱われているらしいので描きました」

「平和と平等か！ぶわっはっはっ、お前らしいわい！じゃが、一目でオヌシと分かるマークじゃないのお」

「うぐっ！」

それは分かった。この世界の旗なんて自分のアイデンティティをそのまま旗にしたものが多すぎる。麦わらの一味は麦わら帽子、白ひげ海賊団はヒゲと船長の特徴がはつきりと出てる。

「別にいいんですよ！ガープ中將！これからあの旗を見たら「クルシュ・ジルベール」だ！ってなるようにすればいいんです！」

「ぶわっはっはっはっはっ!!そうじゃ、そうじゃ！さすがは、わしの弟子!!」

「しかし、ジルベールよお。お前一人でこの船はでかすぎねえか？動かせるのは知ってるがよお」

「ゼファー先生も来てくれたんですね。ありがとうございます」

私の後ろにある船は全長70mの巨大なガレオン船だ。海軍本部で訓練してきた4年間で狩ってきた海賊たちの賞金で購入したものだ。

操作に関しては悪魔の実の能力で船と融合することで船を意のままに動かされる。彼が空母でロンドンへと帰還したときのようにね。「もしかしたら難民とかも乗せないといけなくなるかもしれないからこのくらいで丁度いいんです！」

「そうか。そのでかい船がフル活用されねえことを祈つとくぜ」

「そうしてください」

そうだな、船が人で一杯になるなって想像したくない。それだけ酷い目にあつた人がいたってことになってしまいうからな。

「ジルベール様」

おっと、ここで珍しい人たちの登場だ。

「科学班のみなさん……」

「これは我々からのジルベール様への出港祝いです。どうぞ受け取ってください」

そう言って渡してきたのは黒いスーツケース。その場で開けるよう促され開けるとそこには銃身にJesus Christ is
in Heaven nowと刻まれた黒い拳銃が入っていた。
ま、まさかこれはっ!!

「ほお……これは……」

「対能力者戦闘用13mm拳銃『ジャツカル』」

「今までの火薬入り鉛弾ではなく、初の専用弾使用銃です。全長39cm 重量10kg 装弾数6発 もはや人類では扱えない代物です」

「専用弾は？」

「13mm炸裂徹鋼弾」

「弾殻は？」

「純銀製マケドニウム加工弾殻」

「弾頭は？炸薬式か、水銀式か」

「海棲石塗装済み水銀弾頭で」

「パーフェクトだ、科学班」

「感謝の極み」

ああ……素晴らしい。このやりとりができるなんて……。ってこいつらなんでジャツカルなんて作ってるんだよ。もしかして私の他に転生者でもいるのか？

「ベガパンク様がジルベール様のような方ならいかなる物でも扱えると考え高火力の携帯兵器として考案なさいました。弾丸に付きましては材料及び製造機械を船に積んでおります。材料を含め残弾は船内に数百万発とあります」

「そ、そうか。ベガパンクさんに感謝していたと伝えてくれ」

「承知いたしました」

これは強力な武器を手に入れたな。ただの銃としても火力は十分、非能力者なら木っ端微塵になるだろうし、能力者もロギア系も関係な

く海楼石のお陰で当たれば致命傷を与えることができるだろう。

「じゃあ皆さん、私はそろそろ行きます。今までありがとうございましたー！」

「頑張ってください！」

「センゴク元帥……」

「元気でやるんじやぞ」

「ガープ中将……」

「甘ったるい正義なんて掲げんさんなや」

「サカズキ大将……」

「時々戻ってきてもいいだよお〜」

「ボルサリーノ大将……」

「ジルベール、頑張れよ」

「クザン大将……」

「正義の味方になれよ」

「ゼファー先生……」

「頑張ってくださいー！」

そう言っただけで私は船に乗り込み体を船と融合させる。帆を張り、風に合わせる。風はマリルフォードからシャボンディ諸島に向かって吹いていた。まるで私をシャボンディ諸島に連れて行ってくれるようだ。

「ありがとう、海軍本部」

船はどんどんマリルフォードから離れていき私の言葉は風に乗ってどこかへ消えていった。

◆ Loading

海は良いものだ。広くて優雅で開放的な気分になれる。人々が自由に自由を求めて飛び出していく理由がわかる。

「お、ニユース・クーか。新しい手配書でもできたのか？」

空から降ってきた新聞と手配書。それらに目を落とした瞬間、目を見開いた。新聞の一面に赤い髪と目の傷の男“シャンクス”がデカ

デカと載せられていたのだ。

手配書もシャンクスのものだった。懸賞金額は驚異の40億4890ベリー、新聞でも第4の海の皇帝現るとこれでもかと叫んでいる。

「シャンクスが四皇と呼ばれ始めたか……。少しずつ原作に近付いてきてるんだな。本当にワンピースの世界にいるのが実感できてないな」

「そういえば、この船に名前をつけていなかったな。フランキーが言ってた勢いとかはどうでもいいが名前を付けたほうが愛着も湧くだろうしな」

と言ってもネーミングセンスなんて期待できないしな。前世の有名所の名前でもつけるか？

「ガレオン船……海戦……提督……ネルソン？」

「決めた！この船は今から『ネルソン号』だ！」

「そうなればよろしくな、ネルソン」

とりあえず、どうしようか。今はとりあえず風に合わせてシャボンディ諸島に向かっているが

、次はどこに行こうか。抑圧されてる民衆を助きたいけど、どこで抑圧されてるのかわからないぞ。

原作で明言されてる場所なんてルフィたちが助ける土地で原作に介入してしまうから嫌なんだよな、でもそうすると苦しんでる人々を見殺しにすることになるからなあ。

「原作を改変する覚悟決めるかあ？いやでも……」

ゼファー先生の腕を切り落とさないようにした時点で既に原作改変を行っているからもう諦めるしかないのか。この際だ、せつかく漫画の世界に来たんだ物語が大きく変わらない程度に介入するくらいならいいだろう。

「適当に旅してついた先で抑圧されていたりされてる噂を聞いたら向って助ければいいか。それがいいな……って……ん？」

水平線の先にポツンと見える船。キツネの海賊旗ジョリー・ロジャーを掲げたなかなかデカイガレオン船だ。シャボンディ諸島に向かっているのか、私と

進行方向が同じだな。

吸血鬼の視力でこそ見れるがガレオン船の甲板に見えるのは海賊たち以外に……囚われた人か？手足を縄でしばられて床にあってあれはどう見ても奴隷として売り飛ばされる感じだな。

心優しい海賊が一般人を次の島まで乗せてあげているようには見えない。

舵を回して標的をキツネ船に合わせる。船は大きく傾き、船底は水しぶきを上げ、航跡が目立つ。今回は船内に囚われた人たちがいるかもしれないから大砲は使えない。ならば私が単身飛び込むしかないか。急激に接近してくるネルソンに相手も気づいたようで慌てるようだ。本当にあの悪魔の実は恐ろしい。食べただけで人間の基礎能力が全て化け物じみるんだから。望遠鏡もなしに数km先の人間の表情まではつきりと見れるんだから吸血鬼は恐ろしい。

「ジャツカル……」

さつき渡されたばかりのジャツカルを左腕を台替わりにして構える。彼がチエダース村で白金銃を撃ったときのように。

「全ては民衆の為に」

引き金を引けば拳銃とは思えない鈍く重い銃声と共に弾丸は発射され、キツネ船で望遠鏡を使ってこちらを見ていたクルーに望遠鏡の中を通るようにクルーの頭を吹き飛ばさした。

続けて連射していけば、ドタバタと甲板のクルーはグチャグチャになっていき、キツネ船が大砲を撃てば弾丸が砲弾を撃ち落とす。

甲板にクルーがいなくなれば銃口は大砲へと向けられネルソンに向けられていた大砲は全て破壊された。

キツネ船はそれでも抵抗し壁などに隠れながら当たらないマスケット銃を撃ってくる。諦めない姿は素晴らしいが、民衆を抑圧するのは許さない。

「船を寄せろ！」

「おおー！」

遠距離では敵わないと判断したのかキツネ船自ら近づいてくれるようだ。甲板にもサーベルを持った海賊が集まり始めている、完全に

白兵戦で方を付けるつもりだな。

「では、行くとするか」

体を無数のコウモリに変化させてキツネ船の甲板に着く。キツネ船のクルーたちは突然現れたコウモリに混乱していたがコウモリが集まって人型になったらもう殺るやつの目が変わる。

だが、行動に移さなければ意味はない。

「海賊諸君、略奪ご苦労、さようなら」

「「うわああああ!!」」

その日、レッドフォックス海賊団は壊滅した。この時、逃げ出した数人のクルーたちがまた海賊団を作るがゾロに船を間違えられ船を斬られるのはまたまだ先のお話。

04話 シャボンディ諸島

海賊を惨殺したあと囚われの身となっていた人々をネルソン号へ移動させ、キツネ船の物色を私は始めた。

結果的に2000万ベリーくらいにはなりそうな宝の品々しか目ぼしいものはなかった。船自体も売り飛ばすとなれば更に金になるだろう。戦利品としてもらっておこう。

しつかりとクルーたちの血は舐め取り、船に血痕はなく干乾びた死体だけが乗った幽霊船にしてやった。命のストックがまた増えてしまったな。はっはっはっ！

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとうっ！」
「ん？」

ネルソンに帰還し、甲板を歩いていると囚われていた母娘おやこが話しかけてきた。

「娘だけではなく私まで助けていただきありがとうございます。名も事情も知らない私達を無償で助けていただいた貴方様には頭があがりません」

「いつの日にか、このご恩返させていただけます」

「大丈夫ですよ。私は民衆を守る為に海に出たのです、ですから私は当然のことにしたまでそのご恩とやらは貴方がずっと持つていなさい」

「で、ですが！」

「では、こうしましょう。私もし貴方の故郷に行きましたらその時は私を泊めていただけませんか？」

「……え？そんなことでもいいのですか？」

「いいも何も、本来なら見返りなんて望んでいませんから」

「お兄ちゃん、お家来るの？」

「もしお嬢ちゃんの故郷に私が行ったらね」

「やったー！」

「本当にありがとうございます、本当に

……本当に……」

「あと少しで船はシャボンディ諸島に着きます。それまでこの船旅を堪能しててください。それでは」

「あ、あのー！お名前をお聞きしても！」

「そう言えば名乗っていませんでしたね。私はジルベール。クルシュ・ジルベールと申します」

「クルシュ・ジルベールさん……」

甲板を振り返らず歩いていく。船長室と書かれたプレートが嵌め込まれたドアを開け自室に入る。

そこにはバロック様式の豪華な部屋があった。黒と赤を基調とした蔵かで休めそうにない部屋だ。ガレーラカンパニーさんよ、なんて無駄に豪華にしたんだよ……。

あれか？ こんだけ大きい船だから大船団の旗艦で提督でも乗るって考えたのか？ 残念、一隻でクルーもいない、1人で使う船だよ。

「はあ。早く慣れて寝れるようにしよう」

「それにしてもお兄ちゃん……か」

私は今、4年前の少女の姿ではない。外見は黒い長髪に赤い瞳、性的な美形の青年って感じで赤いコートを着ている。完全に彼を^{彼ら}意識している。

まあ能力のおかげで『姿形に意味は無い』まさにこの状態になっている。この姿にも、幼い少女の姿にも、歴戦の戦人^{いくさびと}の姿にも自由自在だ。私が私足らしめるのは姿形ではなく、私の意志そのものだ。私の意志だけが私でそれ以外は雑多な付属品にすぎない。

「シャボンディ諸島着いたらどこに行こう？ 漫画じゃあ、とある場所」とか、とある王国」とか明言されてないところではつか抑圧されてるからな。場所が全く分からん」

机にグランドラインの地図を広げて次の行き先を考える。

「——ドラム王国がいいか」

ドラム王国。麦わらの一味の船医トニートニー・チョッパの故郷である冬島にある王国。ワポル王の悪政により医療大国だった姿はもうなく、医者自体が国外追放を受けている。国民は医療を受けるため、国王に服従し辱めを受けている。典型的な独裁国家ってことだ。

さらに、この国は滅ぶ運命にもともとある。黒ひげことマーシャル・D・ティーチ率いる黒ひげ海賊団によって壊滅的な被害を受け、ワポルは我先にと逃げ出した。つまり、ルフィたちがやってくる時には国王はいなくなっている、よって国王がいなくなるのが早いか遅いかの問題だ。結果は変わらない。

「そうと決まればシャボンディ諸島で難民たちを降ろして船を手配したらドラム王国へ向かおう」

「えーっと、ドラム島の永久指針は………これか。海軍で要求品目に入れといて良かった、貰える永久指針全部貰ってあるから大抵の場所に行ける」

ナミみたいに記録指針ログポースでの航海も訓練でやったからできるがやっぱり永久指針エターナルポースがあれば行くのが楽だよな。寄り道も当然したいから、永久指針エターナルポースがあればログをいちいち貯めないで済む。

強力なコネクション様々だ。

『パンツ!!』

「!?」

「ってなんだシャボン玉か。もうシャボンディ諸島の領域に入ったのか」

窓を見れば巨大なシャボン玉が浮かんでおり、それらが続々と破裂していつている。

永久指針エターナルポースをキャビネットに戻して甲板に出ると、甲板には難民たちが集まっていて皆、シャボンディ諸島を眺めている。

世界最大のマングローブ、ヤルキマン・マングローブが作り出すマングローブ林。その木の樹脂によって生み出されるシャボン玉が特徴的な土地だ。4年後には最悪の世代が集結し麦わらの一味の一味は全滅することとなる。

原作だと海賊だからって奥の方で停泊してたが私は海賊でもないし、賞金首でもないから堂々と4番GRグローブに停泊しよう。

「おいおい、ありゃあどこの船だ?見たことのねーマークだぞ!」

「デケェ!!」

「大砲の量が異常に多いな」

港にいた人たちもネルソン号の勇姿に騒いでいるな。ちなみに大砲は118門搭載している。

「さあ、皆さんシャボンディ諸島に到着いたしました、あなた方の故郷までは海軍の方々がお送りしていただけることになっております。海軍基地は60番GRから69GRですなのでお気をつけて」

「何から何までありがとうございます。ジルベールさん」

「いえいえ、あっそうでした！皆さん、1番GRから29番GRは無法地帯と言っても過言ではありませんのでそこを通るのはおすすめてきません」

「そうだったのですね。ご忠告ありがとうございます。では、またどこかでその時は我々各自各自の場所でジルベールさんに恩を返しますから！」

そう言つて難民団はシャボンディ諸島に消えていった。

「返さなくていいんだがなあ。——少しシャボンディ諸島を観光してからドラム王国に向かうか」

べ、別に原作で大きな転換ポイントになった土地だから実感してみたいとか聖地巡礼したいとかじゃないんだからね！



「栄えてるな」

多くの人が闊歩し、笑い合っている。表面上はとてもいい都市に見えるが実情は違う。魚人は魚類として差別され人身売買が黙認されているような胸くそ悪い顔も持っているのがシャボンディ諸島でもある。

「ここがああの一ヒューマンオークションか」

着いたのは1番GRにある大きなヒューマンオークション。ルフィが天竜人を殴り、ルフィ・キッド・ローの3人が大暴れしたドフラミンゴファミリーの一ヒューマンオークションだ。

「まもなく、毎月恒例1番GR人間大オークションを開催致したいと思えます!!」

中に入れればたいそう裕福そうなクズ共がニヤニヤしながら所狭しと座っている。全員殺してやりたいがそうするところが潰れて歴史が大きく変わってしまう。グツと堪えるんだ。

「司会はもちろんこの人!! 歩くスーパーバザールことく!! Mr. デイスコ!!!」

「どうも、皆様!! 今回も良質な奴隷達を取り揃えることができました。皆様ラッキー!! 本日は目玉商品もございます!! お好みの奴隷をお持ち帰り頂けますこと心よりお祈りしております!!」

「それでは早速競^{オークション}売を始めていきましよう!!」

「エントリー——」

「やっぱ無理。こういうクズ共は狗のエサがお似合いだ」

「^{マッドネスバンケット}狂乱の宴」

胴体が名状し難いモノに変わると、そこから目がいくつもある巨大な狗の顔が現れる。手足と頭は床に落ち、血が飛ぶ。落ちたものは巨大なムカデになり床を埋め尽くしていく。

「はっあ!?!」

こいつを見てしまったやつがいたみたいだ。目を限界まで見開いて声にならない声を上げようとしている。

「さあ、餌の時間だ」

狗たちは近場のエサに飛びかかりエサは噛み砕かれ食われていく。逃げようと席を立てばムカデに足を取られ足からジワジワと食われていく。まさに阿鼻叫喚、地獄絵図と見た人がいれば100人中100人が答えるだろう。

「何が起こってんだえ!」

客の中に天竜人がいたのか。

ワンピース世界でもっとも底辺のクズ共、天竜人、彼らは800年前に世界政府を作った王たちの末裔で赤い土の大地の聖地マリージョアに住んでいる。

「お前ら何ぼさつとしてるんだえ! 早くやつを捕らえるんだえ!」

「は、はっ! カンヒザクラ聖直ちに!」

天竜人で思い出した。ドラム王国に行く前にマリージョアに行こ

う。そして奴隷達を開放しよう。ついでに、このシャボンディ諸島にあるヒューマンシヨップも全部襲撃して開放しよう。奴隷解放は数年前に「フィツシャー・タイガー」によって行われたがこいつら天竜人共は懲りずに奴隷を生み出し続けている。2度も襲撃されれば少しは懲りるだろう。

「だが、その前にこの天竜人だ」
「!?」

天竜人のそばにいたムカデがまた名状し難い状態になり、そこから右上半身を具現化して天竜人を殴り飛ばす。天竜人は勢いよく吹き飛び階段とデイープキスすることとなった。

「カンヒザクラ聖!?大丈夫ですか!?」

「化け物がっ!」

「そうだ、私は化け物だ。化け物が天竜人を殴らないとでも思っていたのか?」

「たあいぶんたいぶしよう 海軍大将 とお 軍艦 ぶうんかん 目にものを見せてやれ わよべあ!!!
めにぶおのみせびいせてやべえ!!」

顔がぐちゃぐちゃで何言っているか分からんな。どうせ大将で……も……あれ?もしかしてあの3人の誰か来ちゃう?さつき別れたばっかりなのに?あ、これやらかしたやつだ。

「海軍大将がくるまで持ちこたえるんだ!」

「カンヒザクラ聖を安全なところにつ!」

「化け物め!この世界からいなくなれ!」

でも、やらかしたのは仕方ない。過ぎたことは気にしないで前を向いてしまおう。と、とりあえず使い魔を戻して体を再構築しよう。

衛兵たちは既に気が狂いそうになっていたが狗やムカデが体中に目のついた人間の姿に変化していくのを目にしたら彼らのなにかが狂いだした。

「「あひやひやひやひやひや!!」」

彼らは一斉に甲高い笑いをし始め、その槍で私を突いてくる。せつかく人型になったって言うのに名状し難い姿になってしまったよ。

彼らの目は狂気に染まり、瞳孔は見開き、口からは涎が垂れている。

狂気状態でなんだか分からないモノにやりを突き立てている。

「串刺し公の槍」
ツェペシユ・ランサー

私の影は彼ら^{衛兵}の影へ、影はいつまでもついてくる逃げようのないもの。影の槍は獲物を逃さない。

さあ、次へ行こうか。

◆ Loading

「な、何だこれは……本隊に連絡しなくては!!」

海軍駐屯地から派兵された海兵達が見たものは見た者すべてを震撼させた。

シャボンデイ諸島にある全ての職業安定所があつた場所に森ができていた。本来無いはずの森、上を向いてみればあるのは血が抜かれカラカラに干からびた串刺し死体、そう木と見間違えたのは串刺しにされた槍だったのだ。

「こりやあ、ジルベール。やり過ぎやしねえか?」

「クザン大将!!ご苦労さまです!」

「天竜人は?」

「世界政府経営の大病院に緊急搬送されております!」

「あー分かった。……全部隊に連絡しろ。クソでかいガレオン船を探し出せ」ってな」

「ガレオン船……ですか?」

「いいから、さっさと連絡してきなさいな」

「はっはい!」

「初っ端からやってるなあ。こりやあ初頭の手配からどえらい金額になるぞ」

05話 第二回奴隷解放大会①

どうも、シャボンディ諸島のヒューマンショップを襲って店員を皆殺しにして奴隷を解放して天竜人を殴り飛ばした化け物です。

赤い港レッドポートに逃げたんだが、流石に天竜人を殴り飛ばしたやつがマリージョアの目と鼻の先であるこの地にいるとは思わないだろう。では、天竜人屠どもを懲らしめて哀れな奴隷達を解放しよう。

かのフィツシャー・タイガーは素手でこの途方も無い崖を登りきつたらしい。しかし、私は吸血鬼、体をコウモリに変化させて簡単に登らせて貰おう。

赤土の絶壁を無数のコウモリが駆け上がっていく。コウモリの集団を見た赤い港レッドポートの住民たちは絶壁に描かれた世界政府のマークに第5の道が現れたように見えたという。

雲を超え、赤い大地にたどり着いて最初に目に入ったのは広大な森と遠方に見える豪華な城“パンゲア城”だった。

しっかしここからどうしようか。マリージョアの奴隷達がどこにいるのかもどこにどんな施設があるのかもわからないぞ。唯一分かるのは動く歩道の下に多くの奴隷がいるぐらいだが、四六時中あの場所にいるとは限らないしな。

こんな時こそ吸血鬼の霧状化能力だろう。体を霧に変化させて広範囲を一切怪しまれずに探索することができる。そうなれば早速実行に移そう。

体の末端から体が砂になるように霧に変わっていく、体全体が霧に成り代わる。修行のときもやったが、やっぱりこのコウモリ状態とはまた違った感覚になれることはないだろう。

さあ、第二回奴隷解放大会の開催だ



「今日は霧が濃いな」

「そうだな。こんなに霧が濃い日は今まで無かったんだじゃないか

？」

マリージョアの警備を行っている2人の衛兵は巡回ルートで日頃と違う霧の濃さを話題に暇をつぶしていた。

パンゲア城ですら広大だというのにその周辺の天竜人の移住区と政府機関を警備するとなれば巡回ルートは長く、滅多に襲撃されることのないマリージョア警備は暇で仕方なかった。

それでも、ただ暇つて言うわけでもない。ルートを間違えたりすれば下手すれば天竜人に死刑を宣告される可能性もあるため、曲がる場所では必死に記憶に間違いがないか考えたりしてはいる。

「なあ流石に濃すぎないか？」

「そうか？確かに太陽が見え辛くなってきたな。でも、このマリージョアもグラウンドラインを横断するようにあるんだから摩訶不思議な天候があつても普通じゃないか？」

「それもそうだが……」

この時、映像電伝虫を使った監視は非常に濃い霧のせいで真っ白な画面しか映さない木偶の坊になっていた。

監視室の監視官たちはこの状態にはお手上げで巡回に当たっている衛兵に警戒を怠らないよう連絡するしか対応ができなかった。

建物の中にまで霧は侵入していたが外に比べて薄く、ミストサウナ程度の濃さだったため天竜人もなんとでも思わず過ごしていた。騒いだところで自然現象をどうにかできる人間なんて

なにか起こった場合、すぐさま警報がなりマリソフォードへ報告された後、海軍大將を中心とした即座に動かせる戦力が動員されるが霧が濃い以外、何かが起きているわけでも無いため定時連絡は

——異常なし——

それだけだった。これはどの巡回グループでも駐屯地でも同じことだった。

しかし、この霧がただの霧ではないことに気付くチャンスは十分にあった。霧状になっても彼女が悪魔の实の能力者であることには変

わりはない。

能力者の奴隷に付けられた海楼石の手錠や海楼石の牢には触れることができなかった。そのおかげでこの妙な霧は海楼石周りには近寄らず海楼石の牢の内部には霧が一切なかった。

見聞色の覇気を使えばもつと簡単に確実に発見できただろうが、彼女の中にいくつもの魂がそれを錯乱させた。

何も無い所に無数の気配を感じ取り気配のする場所に拳を叩き込んでもなにかに当たったりはしない。

感覚が過敏になつてると楽観視する者もいれば、謎の気配を駐屯地に報告しようとする者もいたが彼らは等しく霧に消え、使い魔として霧から現れていった。

濃霧の中で人知れず、悲鳴を上げることも抵抗することも許されず吸血されたり狗に丸呑みにされていたのだ。血を吸われ彼女と命が同化してしまった彼らは使役され、何が起きても異常なしと答え開放された奴隷を保護する役割を持った彼女の手駒となった。

命を同化させ、彼らの記憶でマリージョアの巡回ルート・駐屯人数・構造 e t c . 色々知ることができた彼女は奴隷たちを縛る手錠の鍵を手に入れ衛兵たちに気付かれないうで奴隷を解放していった。



彼は何処からともなく現れた。

赤い目に赤いコート、男か女かわからないがどちらにせよ整った顔、ひどく魅力的な人間だったが、同時に人間味を感じられず不気味にも感じられた。

彼は俺たちの錠を外す鍵を持っていて、俺たちを開放してくれた。彼の正体が人間でなかったとしても俺たちは彼に一頻り感謝した。

もうあんな生活は懲り懲りなんだ。これがもしも悪魔との契約だったとしてもここに奴隷たちいる仲間たちは喜んで悪魔の手を握ったことに後悔はないだろう。

彼は牢にいた全員の手錠と首輪を外したら口を開いた。

「このあと赤い布を腕につけた衛兵がここに来る。外で大きな物音が聞こえ始めたら衛兵の指示に従ってこのマリージョアから脱出しなさい」

彼の一言はこの屈辱的で死と隣り合わせの生活から逃げ出せる道を照らすのには十分なものだった。

彼はまた現れたときのように霧のように消えていった。

彼がいなくなつてすぐ、赤い布を腕につけた衛兵が本当に来た。いつもなら憎たらしくて殺してやりたい衛兵だったが今日に関しては救いの手を差し伸べてくる天使のように見えた。

彼がいなくなつて30分もたった頃だろうか。外でなにかが倒壊したかのような大きい物音が地上につながる階段から駆け下りてきた。

それが合図だったかのように衛兵は牢屋の鍵を開け外に出るよう促してくる。それに素直に従い衛兵に付いていけばなんともあつさり地上に出れてしまった。

地上にでたらそこはいつものマリージョアとは180度違う光景だった。各所で炎が上がり建物が崩れていつてる。

俺たちはこの変わり果てたマリージョアを必死に走った。ここで逃げそびれたら一生奴隷のままあの地獄の日々を送らないと行けないと思えば自然と足に力が入った。

奴隷になった俺たちはそれまで持っていた他種族への差別意識はなくなっていた。同じ境遇に耐える仲間意識が生まれていったからだ。

奴隷以前は巨人や魚人なんかを助けようとは思わなかったが、今は違う。みんながみんな助け合つてこの地獄から逃げようとしている。

例えば、足がヒレになつてる人魚たちはシャボンなしでは地上で立つこともままならない。だから巨人が手に持ったり、人間が背負ったりしている。

逃がっている最中も後方から爆発音と銃声、砲撃音は止まらず激しい戦闘が起こっているのがよく分かる。彼は俺たちが逃げ切るまであやつて衛兵たちを足止めしてくれているんだろう。

彼は第二のフィッツシャー・タイガーだ。第二の奴隷解放の英雄なんだ。



「くたばれ!!化け物!」

マリージョアを半壊させた私は多勢に無勢、徐々に衛兵たちに押されついに槍を心臓に突き刺された。

「化け物め!人間の力を思い知ったか!」

「我々の勝利だ!!」

「!!おおおおおお!!」

勝利の雄叫びを上げ、化け物を仕留めた力を誇示する衛兵たち。

更に追い打ちをかけるように私に槍を突き刺し、首を刎^はね頭と体を槍で持ち上げ晒す。

「勝利の味はどうだ?」

その場にいた衛兵たちは即座に晒し首を見た。首を刎^はねた時と同じにやけた顔だったが次の瞬間、頭も体も名状し難い状態になり殺したはずの化け物が目の前に立っている不可思議な状態となった。

「残念でした。君たちが必死に殺した相手は数ある私の命のたった1つに過ぎないんだよ。あと2538回殺せばこの化け物を完全に殺せるぞ?」

「なに、たった2500回程度だ。その人間の力で私を殺してみせろ人間。一度は諦めず死を乗り越えて見せたんだ素晴らしい人間たち。化け物はここだ!!ここにいるぞ!!さあ来い!お楽しみはこれからだ!!早く!早く!早く!早く!早く!早く!早く!早く!早く!!」

衛兵は絶望していた。何十人もの仲間を犠牲にやつとの思いで仕留めた相手が蘇ったどころか完全に殺すにはあの戦鬪を果てしない回数行わないといけないとはもう立ち上がれる者はいなかった。

あとはただの虐殺だった。人間が紙を破るように容易に引き裂かれ、バットのように振り回される。一瞬で文字通りボロ雑巾のされ、食い殺されたりする。

逃げようものなら狗に襲われ食われ、挑もうものならボロ雑巾。死からは誰も逃れられなかった。

戦闘とは言えない、一方的な虐殺。数分もすればその場にいた衛兵たちは皆死に殺すべき化け物の魂のストックの1つと変わり果てた。「素晴らしい人間たちだった。この世界は人間で溢れている」

私は歓喜した。目から血の涙を流すほど私は嬉しかった。この幸福感をずっと感じていたい。ずっと実感していたい。

だが、することはある。

「五老星のところに向かうか」

五老星、世界政府の最高権力者たち。彼らの決定には海軍の元帥ですら従う他なく、まさに世界の支配者とも言い換えられるかもしれない。

霧はまだ広げっぱなしで彼らがどこにいるのかはすぐに分かった。

霧を利用して彼らの前に姿を現せば、一瞬驚いたようにも見えたが堂々と待ち構えている。流石だ。

「君が侵入者か」

「そうだと」

「奴隷解放が目的のようだが私達を殺しに来たか？」

「そんなことはしない。あなた方は良くも悪くもこの世界を維持してきた。私は世界政府を壊したいわけではないからな」

「ではなぜ我々の前に現れた」

「単刀直入に言おう。解放された奴隷たちを連れ戻すな」

「なに？」

「9年前、フィッシャー・タイガーのよる奴隷解放の時、あなた方世界政府は奴隷を天竜人の所有物として連れ戻していった。あなた方は解放された奴隷たちが連れ戻されたときの絶望がわかるか？自由を手に入れそれを奪われる絶望が」

「——断つたら？」

「なに簡単なことだ、マリージョアが崩壊を迎えるだけ。ただそれだけだ」

「分かった。要求を飲もう」

「話が早くて助かる。ではそろそろ私は去ろう」

「待てっ！君の名を教えなさい」

「クルシュ・ジルベールだ」

来たとき同様、霧を使って前半の海側のボンドラ前に移動する。

五老星の威圧でピリピリした会話になってしまったが、五老星への用事は無事完了したと考えていいだろう。彼らが故郷に帰った後でも政府からの刺客に怯えて暮らすなんて到底許すことはできなかった。

「では、次は第二回奴隷解放大会第二幕海軍との大合戦だな」

彼女は不敵に笑いながらマリージョアから飛び降りた。

06話 第二回奴隷解放大会②

「ジルベールのやつ、シャボンディにいないと思ったらマリージョアにいたのか。やるじゃねえか」

「灯台下暗しとはこのことだね。それにしても三大将全員招集なんて天竜人も相当焦ってるみたいだねエ」

「ジルベールの大馬鹿が。これじゃあ、海軍の面子丸潰れじゃろがい」
赤い港にはマリージョアからの要請を受け20隻もの軍艦と三大将レッドポートのほか多数の海軍将校たちが待ち構えていた。

奴隷たちは最初、確保され牢に入れられていたが五老星からの命令で扱いは保護に変わり、故郷に送られることとなった。

ちようど五老星からの命令が電伝虫で伝えられたときだろうか、ボンドラ乗り場近くの広場に空から何かが降ってきたのは。

大量の砂埃を上げ地面に着地したそれは土埃が晴れていくと同時に姿を鮮明化していった。

「さつきぶりですね。皆さん」

暗く深くそして赤い瞳に妖艶で不気味な顔そして目と同じ色をしたコート、彼女だ。

「本当だよねエ。今朝別れたばかりなのにこれだけ騒動を起こすなんてねエ」

「これが私の信じる正義なんですよボルサリーノ大将。サカヅキ大将も私の正義を理解していただけますよね？」

「理解はしちよる。だが、これじゃと海軍の面子が立たんじやけエ」

「つまり、私と戦闘した事実が必要ってことですか、組織の正義は大変ですねエ」

「お前が大変にしとるんじやろうがっ!!」

「そう怒るなよ、サカヅキ。なあ、ジルベール。お前はお前の正義に胸を張れるか？」

「もちろん」

「そうか。それならお前の正義を俺たちに見せてみろ」

「!？」

「アイス・エイジ
氷河時代」

クザン大将の代名詞でもあるこの技によつて地面は凍り、私はとつさにジャンプし避けようとしたが間に合わず足を凍らされ身動きがとれないようされた。

そこを狙つてボルサリーノ大将が指からレーザービームを撃つてくる。光の速度で撃たれるビームには見聞色の覇気がなければ絶対に当たつてしまう、鍛えてくれたガープ中将には感謝しかない。

だが、生憎足が固定されどうやっても避けられない。さらに後ろからはサカズキ大将が迫つてきている、四面楚歌とはこのことか？

この状況を打破するために足を犠牲にした。凍っている足を影の槍で抉り取り、体が空を舞つた瞬間体をコウモリに変化させて3人から距離を取つた。

「なかなか思い切つたことやるじゃない」

「足がなくても堂々としちよるのう……」

「怖いね〜この若さ」

海軍本部での修行中は将来敵対することを見越して使つていなかった能力が多くある。そのおかげで彼らは私の回復力も不死性もまだ知らない、そこを利用してこの島から逃げれるか。

速度ではボルサリーノ大将には勝てない。パワーではサカズキ大将には勝てない。対応力はクザン大将には勝てない。なにをしたらこの状況から逃れられる？

「正義なんでもものは立場によつて形を変える。だから別にお前の正義は責めやしない。だが、俺たちは組織の一員だ。命令されたとあれば実行しないとイケねエ」

どうすればいい、どうすればこの島から逃れられる。彼らと戦い、この島から逃れるのは簡単だ。だが、ここは港町。民衆の生活の場でありこんなところで暴れれば民衆に大きな損害を与えてしまう。だから困っているのだ。

影に潜つて逃げるか？霧になって逃げるか？コウモリになって逃げるか？

私が選択したのは影に潜つて逃げることだった。まず、ジャツカル

をクザン大将に当てるように見せかけて彼の後ろの先にあるネルソン号を狙って打ち込む。そうしたらさすがに影に潜り、弾丸の影に移り弾速と同じ速度で船に向かっていく。

これには三大将も予想外だったようで案外すんなりと逃げれてしまった。影に潜ることができるのは彼らも知っているが、知つていてもどの影に潜んでるかまでは分かるまい。たとえ見聞色の覇気が使えても影に潜んでいればバレないのはガープ中将で検証済みだ。

「ここからが正念場だっ!!」

銃弾がネルソン号に当たると同時に融合、そしてそのまま出港。出港できたがクザン大将が海を凍らしてくるかも知れない、ボルサリーノ大将が八咫鏡で移動してくるかも知れない、サカズキ大将が流星火山を撃つてくるかもしれない。更には軍艦からの砲撃も注意しなければ、気は気抜けないな……。

「あららら、ジルベールちゃん影に潜られると見つけれねエからな」

「これは一本取られたねエ」

「船が動きよるってこたアあいつは船と融合しとるのか」

3人はジルベールを追撃しようとはしなかった。旧友の旅立ちを眺めるかのような眼差しで軍艦からの砲撃の中、逃げていくガレオン船を眺めていた。



離れていても鼓膜を揺らすような勇ましい砲撃音と共に海軍軍船の特徴的な砲塔から砲弾が飛んでくるが当たるとはなく遠くで大きな水柱を作り出しただけだった。

ネルソンを作る際、機動力とスピードに重点を置きながらなるべく重武装で、と無茶振りを頼んだが、流石ガレーラカンパニー性能は要求通りだ。おかげで海軍の追手をぐんぐんと突き放していつている。もはや、敵船は彼方。

「このままいけば簡単に逃げられるだろうが、前世ではありえないこの状況。もつと楽しみたいと思ってしまうのが元男のロマンだよ

なア」

船を大きく傾かせ旋回する。大砲の射程なんて訓練で叩き込まれて理解してる安心して旋回できる。さっきの砲撃はアホな新兵が独断で撃つたんだろう今頃上官にこっぴどく叱られてるだろうな。

今までは逃げていたが海の上では戦うぞ。海には民衆はいないからな。

「敵艦は15隻で単縦陣か。残りの5隻がどこに行つたか気になるな」

敵艦隊とネルソンは反航戦になるかのような向かい合った状態でお互い船を進めていき、距離はどんどん短くなって行く。2000m……1500m……1000m……実際は数十分間経っているが私にとつては数分に感じられたそれほど緊張しているということだろう。

敵艦隊との距離が500mを切ったとき、敵艦隊の進路を塞ぐように転舵させた。射程には入ってしまったがこの距離ではたとえ止まっている標的でも当たることは滅多にない距離だ、この調子ならやれる。

転舵したあと、ネルソン号の実用射程に敵戦列の先頭がほぼ直角に入れさせることができた。理想的な丁字戦法となった。

そう、私が狙っていたのは丁字戦法だった。艦艇数で負けている私は白兵戦で勝てるとしても船を失ってしまう。ならば、敵陣形を利用して1隻ずつ各個撃破するしかない。武装なら大量に積んでいるから火力は十分だ。

「斉射、てえ!!」

側面にある50門の32ポンド砲が一斉に火を吹き先頭一番艦にいた海軍船を破壊していった。この一撃で一番艦はあの特徴的な砲塔を破壊され、前方にいるネルソンに手も足も出せなくされた上、マストも破壊され航行不可能となった。

急に止まった一番艦を避けようと戦列からはみ出てきた二番艦も一番艦と同じ運命をたどり、2隻が使い物にならなくなったところでネルソン号と敵艦隊との同航戦に移った。

同航戦中も圧倒的スピードをもつネルソン号は大きな円を描きながら再び丁字戦法をできるよう立ち回っていた。

同航戦は船を私の体と融合させているネルソン号が圧倒的有利で例え砲撃が直撃しても私の再生能力で船も修理される。一撃で木っ端微塵にしない限りはダメージが意味をなさないので。さらに、体を動かす感覚で砲撃できるため敵の倍以上の速度で砲撃することができた。

結果、同航戦ではネルソン号無傷に対して海軍側は大破2中破1小破4の圧勝となった。

同航戦の終わりは再び私が丁字戦法を行ったことで迎えた。最大船速で転舵したが理想的な形にはならなかったがそれでも一隻に対しての集中砲火は効果的で大破1中破1の戦果を上げた。

無傷な船が残り4隻に大破した船が5隻とガレオン船1隻にありえないほどの損害を与えられた海軍は白旗を掲げ降伏した。

「私がこの艦隊の司令長官のピエール・カスカード中将だ」

海軍本部にいた頃に聞いたことのない名前だな。どこかの支部の人間か？

「私はこの船の船長クルシュ・ジルベールだ」

「……………」

「あなた方は私に降伏したということですよね」

「ああ…………ただ、私の首一つで事を済ましてはくれないだろうか？それで部下たちには手を出さないでくれ…………」

「ほお」

部下のために自らの命を投げ出すというのか。この人は生きる価値があるな。

「あなたの首なんていりませんしあなたの部下に手を出すつもりはありません。取り敢えずあなた方に武装解除を命じます。船にあるすべての武器をこの船に」

「それは真ですか！感謝します、ジルベール殿」

そう言いながら彼は電伝虫を使って全軍に武装解除を命じた。海

軍船から木箱に詰め込まれたサーベルやマスケット銃が積み込まれていく。詰め込まれた武器は床に沈むように床に飲み込まれていき倉庫に運ばれていく。もちろん能力のおかげで海兵たちは飲み込まれていくたび驚いていた。

「それではあなた方の処遇についてお話します」

ネルソン号の会議室には各船の船長が集まり下される処遇について緊張していた。

「あなた方は私の捕虜とし海軍との交渉で海軍に明け渡します。それまではそれぞれの船で待機してください、航行不能の船や沈みそうな船は他の軍艦に移るかこの船に移るかしてください。この船に乗る場合、人道的な対応は保証しますよ」

「……………」

16人の将校たちはお互いの顔を見合うと全員が席を立った。

「人道的な対応感謝申し上げます」

そう言って今まで脱がなかった軍帽を取り、頭を下げた。

こうして後に「赤い港沖海戦^{レッドポート}」と呼ばれる史上稀に見る完勝の海戦が終結した。

ちなみに、大破となった軍艦5隻はジルベールの能力で影に取り込まれ戦利品として押収された。

海軍との交渉は円滑に行われ、海軍艦隊10隻と約1万2千人の海兵は海軍に帰還しこの代わりに5億ベリーが支払われた。

「5億ベリーと無傷の海賊船1隻と大破した海軍船5隻かア、ドラム王国に行くのはもう少し後になりそうだ」

船長室で地図を眺めていて私はそう思った。キャビネットから1つの永久指針^{エターナルポース}を取り出した。

永久指針^{エターナルポース}には「ウォーターセブン」と刻まれていた。

07話 棚からぼた餅

「私は海賊じゃあねエエエエ!!!」

私の手元にあるのは新聞とこの4年間で呆れるほど見てきた顔の手配書だ。

新聞には一面にデカデカと海戦のときの私の写真が載せられこう締めくくられていた。

「第二の奴隷解放の英雄・史上最悪の偽善者クルシユ・ジルベールは三大将を相手取る強さ、ガレオン船1隻で海軍軍艦15隻に完勝する指揮能力どれをとっても世界屈指の海賊と言えるだろう」

これは……直接世界経済新聞に問い合わせないとだな。

「それでもつてこの手配書かア」

新聞と同じ写真で作られた手配書、そこに書かれた金額は3億5000万ベリー。最初の賞金額で3億超えてどうなってるんだよ……。どうせ天竜人が早く捕まえるよう色々横槍を入れたんだろうな、センゴク元帥お疲れさまです。

「はあ……」

レッドポート 赤い港沖海戦から早くも2週間ネルソンは広大な海を突き進んでいる。今日は追い風で最大船速で進むことができているが、向かい風の日にはそれも舵を切つてなんとか前進していった。こうなると帆船は面倒くさい。

そんなことはどうでも良くて問題なのはあともう少しであるの魔の三角地帯フロリアントライアングルに突入するつてのに食料がないってことだ。

ここで勘違いしないでほしい。ここで言う「食料」っていうのはパンや肉、魚といった普通の生物が食べるものではなく、吸血鬼としての食べ物「血液」のことだ。別にパンや肉が食べれないというわけではないが、それらの食料はこの体になってから栄養補給としての意味をなくしてしまっている。

血液が私の主食であり、主菜であり、副菜であり、汁物なのだ。海軍本部時代は使用期限ソが切れた輸血味パック飯で過ごしていたが、こんな海の上ではストックをすることでどこかまでも手に入らない。血液を

1Lも飲めば1週間くらいは飲まず食わず不眠不休で動いていられるが最後に血液を飲んだのは3日前のことだ。どこか島によって血液を補充しないと駄目だな。

この姿彼の姿で行くのは不味いだろう、なにせ3億5000万の賞金首でマリージョアを襲撃した悪党として世界に顔も名前も届けられているんだから。

だが、悪魔の实の能力を使えば楽々と姿を変えることができる。献血ということでも血を集めるためには優しそうで親しみやすい姿が良さだろう。

それらを考慮して出来上がった姿は「真つ赤な軍服を着た金髪碧眼の少女で、服の上からでもそれとわかるほどの巨乳っ子」といった感じで彼女婦警の姿になった。軍服を選んだのは軍用の輸血パックためとすれば民も協力してくれるだろうという魂胆だ。

名前はそうだな……「ヴィクトリア・カーミラ」とでも名乗ろうか。

じゃあ後は、肝心の島を見つけないとだな。地図で確認すれば現在位置から少し先にある程度の大きさの街がある島があったからもう少し経てば見えてくるだろう。あともう少しで新鮮美味しい食事な血液にありつけると思うとワクワクしてきてしまう。

◆ Loading

「やあ、らめえ……つあああつ」

島に寄港することを決めて3日後、やっとフロリアントライアングル魔の三角地帯の手前の島の町にたどり着いた。

献血活動を装って町外れの空き家で食料のストックを生産していたが、6日間血液を飲んでいなかった飢餓感に抗えず直接女の子を吸血してしまった。

極度の飢餓感の中、目の前で若い女この子の血液走のあると思ったら誰しも飛び付き貪り食うに決まっている。

そして、相手は感じたことのない快樂に溺れているかのようとろに蕩け

きつた顔をしていて、今はない股間が熱くなるのを感じた。

血液は健康に害が出ない範囲で採取し、献血のお礼としてパンと多少のベリーを渡している。採取した血液はすぐに急速凍結機に入れて鮮度を保つ。海軍本部で食べていたものなんてこの女の子の血液と美味しさを比べたら雲泥の差だ。

「ぷっはっ！」

「ハア……ハア……ハア……」

蕩けきつた顔で私の顔を眺めている彼女は私にキスを求めるように目を閉じ顔を近づけてくる。それに答えるように私は彼女と濃厚なキスをした。

「カーミラさん……私ッ！」

「ごめんなさい、ニコラさん。私は貴方に多くのことを隠しているのだから——」

「それでもいいんです！私をそばに置いてはくれませんか？」

彼女は吸血された快樂と決して短くない時間目を合わせたことで罹った魅了の力のせいで、こんな状態になってしまった。

船に乗せてもいいが一般人が乗るには危険な旅になるだろうから相応の覚悟が必要になってくる。その覚悟が彼女にあるかどうか……。

「本当に私と海に出るのかい？私の正体を知ったとしても？」

「——はいッ！」

彼女の覚悟に応じるように姿を“カーミラ”から“ジルベール”へと戻す。彼女の表情は少しびびくりしたかのようなものとなった。

「もしかしてクルシュ・ジルベールさん……？」

「その通りだ、私が先日第二次マリージョア襲撃事件を引き起こしたジルベールだ。私に付いてくるといふことは多くの事件や危険に巻き込まれる可能性が、そして死ぬ可能性がこの島で住むより何倍も何十倍も高まるぞ」

「それでも貴方の側にいたいんです！」

「君は今、吸血された際の快樂と見つめた時の魅了の力に支配されている、その思いは作られたものだ」

「作られたとしても……私は……」

相応の覚悟はあるようだ。

「ニコラさん、両親の許可を得たのであれば私の側にいることを許しよう」

「本当ですね!?行つてきますッ!」

彼女は即座に立ち上がり空き家から去っていった。行動力の塊だな……。

「次の方どうぞー」

「あいよ」

次には入ってきたのは小さなお爺さんだった。細く小さくワンピース世界では珍しい普通のお爺さんだ。

「お爺さん、年齢教えてくれるかな。65歳以上だと65歳以上になつてから献血した経験がないと献血できないんです」

「わしゃあ、65だ」

「でしたら献血できます。協力ありがとうございます。採血はおおよそ10分から15分ほどで終了します。採血後は少なくとも10分ほどはここで休憩していただきます」

「分かったよ」

お爺さんの腕をガーゼで消毒して採血針を刺すとチューブの中を血液が駆け抜けていき、輸血パックを満たしていく。

「お嬢さん、海賊じゃろ?海の香りと血の匂いがする。海軍で染みつくものとは違う海賊の匂いじゃ」

突然のお爺さんからの質問に私は回答に詰まった。私自身は海賊ではないと思つてはいるが、世間一般には海賊として認知されているからだ。

「凶星じゃろ?エツエツエツ」

「私自身は、海賊になつたつもりはないのですがね、それでお爺さん私を海軍に突き出しますか?」

「そんなことはやらんよ。やるんだつたら献血なんて受けんじやろ?エツエツエツ」

食えない爺さんだな。

「お嬢さんいい物をあげよう。大先輩からのありがたいプレゼントじゃ、北の海のスワロー島に住んでいるヴォルフという面白い爺さんが発明した物の設計図じゃ。とっておき」

採血されながら懐から取り出してきたのはそれはそれは古そうな設計図だった。機械の設計図ということは分かるがそれ以外は全くわからない、前世で文系だったことがここに来て悔やんでくる。

「それはな、ヴォルフが発明した高圧水管ボイラーと巡洋戦艦いうものなんじゃ。このボイラーとやらは最近できた海列車あるじゃろ？あれに使われておる動力よりも強力で巡洋戦艦つてのは船すべてを金属で作ってあつてそれそれは鉄の化け物のようなものじゃった」

この爺さんなんてもの持っているんだ……。この世界の船といえは帆船、揚力で進んでいる中、ボイラーを使った船だと？せいぜい17、8世紀の船の中に20世紀の船を登場させたらどうなるかなんて想像するだけでもカオスだ。

確かにハートの海賊団の旗艦は潜水艦だ。潜水艦があるつてことは造船技術は第一次世界大戦並みつてことだ。おかしいことはない。

「お爺さん、ありがとう。有活用させてもらうよ」

「いいんじゃない、いいんじゃない。かわいい後輩のためじゃしワシが持つてても宝の持ち腐れだわい！エツエツエツ！」

これは海軍船とキツネ船の修理と改装とかと一緒にネルソンも改装を———と思つたが改装に収まらないだろうな。新造したほうが案外安く早く済むかもしれない。今持っているベリーは5億2000万ベリーと大量の武器、この武器を売却すれば100万ベリーは超えるだろうが船の建造費と比べたら雀の涙ほどだ。

「はい、お爺さん。採血終わり、あつちのソファで休憩してて。紅茶とコーヒーあるから好きなの飲んでいいですよ」

「酒はないのかい？」

「ないです」

「少しも？」

「一切ないです」

「分かったわい、じゃあコーヒーを飲むぞ」

「ええ。そう言えばお爺さん、さつきから自分のことを大先輩とか私のことを後輩ってお爺さん若い頃海賊だったの？」

満杯になった輸血パックを急速凍結機に入れながら爺さんに気になっていたことを問いかける。

「そうじゃ。ある海賊のクルーとして世界中で暴れまわったんじゃ！あのロジャー海賊団とも一戦交えたんじゃぞ！」

「へー」

「なっ！さては信じてないな」

「そんなことないですよ。それでそのブイブイ呼ばせていた海賊がなんでこんな辺鄙な島に？」

「むう……まあいいわい。ワシがまだ海賊やった頃にな、正確な海域は忘れたがここら辺である海賊と戦ったんじゃ」

「ワシらは武器に毒を塗り戦い相手を壊滅に追い込んだ。じゃが歳をとったらワシみたいにも良心が生まれ彼らの残党を探しておるんだ。もう誰も生き残っていないと分かって思ってもな」

「………海賊はしぶといですから骨になっても航海を続けているかもですよ」

「じゃとしたらいいんじゃがなあ」

「はい、10分経ちましたからもう戻って大丈夫ですよ」

「そうかい、んじゃお暇させてもらおうかな。お嬢さん、いい人生を送れよオ〜」

そう言っただ爺さんは出ていった。話し方もその内容も昔を懐かしむような感じでリアリティがあつた。信じてもいいのだろうか。

それはそれとしてこの設計図は思いがけない戦利品だ。これら元にもウオーターセブンで建造してもらおう。建造費はだいたい15億ベリーは行くんだろかな。これは懐がすっからかんになるどころか全く足りなくなる予感。

『バアッーン！』

「ジ、カーミラさん！」

勢いよくドアを開けて入ってきたのはニコラだった。走ってきたのは肩で呼吸している。

「両親から許可得てきました！だから貴方のそばにいさせてください！」

「あーうん、分かったよ」

「やったあ!!」

こうして、補給しによった島で思いもよらない品と愛人を手に入れたしまった。これがいわゆる「柵からぼたもち」ってやつですか。

08話 水の都

”水の都”と呼ばれ、町の中心に巨大な噴水が存在する巨大な島。島には水路が張り巡らされ人々はブルというのか生き物を船にして日常的に使って生活している。

「美しい島だ」

「そうですね。ジルベールさん」

甲板でニコラと一緒に進行方向に見えるウォーターセブンを眺めていると踏切の音が聞こえてきた。

「あれが海列車……」

彼方からやってくる蒸気機関車のような見た目の船だ。あの見た目で船なんだから前世で知ったときは誤植じゃないか目を疑った。

力強いブローア音と獣の咆哮のような野太い汽笛を鳴らしながらやってくる海列車はネルソン号をさっそうと抜かしていきウォーターセブンへ向かっていった。

「ジルベールさん！私達も早く行きましょう！」

「そうだな」

船はどんどんウォーターセブンへと近付いていき港に停泊した。

「でけーガレオン船だな、兄ちゃん。冒険家か？」

船から降りたら、船を眺めていた市民と思われる男に話しかけられた。

「違いますよ。海軍とは違う正義を背負った正義の味方ってところですよ」

「海軍とは違う正義ねえ。あんたあれか天竜人の所業を見て海軍辞めてきた口だろ？」

「そんなところですね」

「じゃああんた、史上最悪の偽善者クルシユ・ジルベールの事件聞いて胸がスカッとしたろ？わはっはっはっ」

そのジルベールが目の前にはいるんですがね。

「確かにスカッとしましたね。市民の方々はどう思ったのでしょうか？」

「そりやあ皆、胸がすく思いさ。あのフィッシャー・タイガーですらなし得なかつた天竜人の殺害。天竜人を憎む人間はいても感謝する人間なんていないからな」

「そうでしたか。あ、私はこれで失礼します」

「ああ、呼び止めて済まないな」

そう言うとも男は人混みの中に消えていった。ニコラも男が見えなくなつたと同じくらいで船から降りてきた。

「遅れてごめんなさいジルベールさん」

「大丈夫だ。じゃあ船をしまうから少し離れていてくれ」

「はい」

右腕を名状し難い状態、影に変化させて船を覆い尽くす。そのまま船を影に取り込んでいき、船を体内にしまい込む。こうすれば好きな時、好きな場所でいつでも船を使える。

この一連の光景を見た市民たちはエネルギー顔をしていてワンピース世界に来て一度は見たかつたものが見れて大満足したのはまた別のお話。

「ニコラ、まずはガレーラカンパニーの本社に行くぞ」

「はい、ジルベールさん！」

ブルを借りて町中を進んでいく。この個体は結構賢いらしくガレーラカンパニーの本社がある造船島へ入るために通る水門エレベーターまで最短ルートで向かってくれた。

「水が下つてる道でも進めちゃうんですねこの子たち」

「強い生き物だな、あとで水水肉でもあげるか」

「水水肉？」

「この島の特産品だ。それとこいつの好物でもある」

「そうなんですか。ジルベールさんって物知りですね」

「そうかもな」

『お入りください。エレベーターは“造船島”造船工場及びウォーターセブン中心街へまいります。門の中へお急ぎください、閉門1分前です』

水門エレベーター、門を閉じて中に水を足していき水位を上昇させ

てまるでエレベーターのように移動する。

前世でもこの方法を取っている場所は多くある。一番有名なのはパナマ運河だろう、よくパナマ運河をスエズ運河のように海面水路だと勘違いしている人がいるが実際はこのエレベーターと同じ方法で大陸を船が跨いでいる。

扉が開かれればまず目の前の巨大な噴水が目に入る。遠くからでも巨大に見えたんだ間近で見ればその大きさは尋常じゃないことが身に沁みて分かる。

そしてこの街に来た目的、ガレーラカンパニー本社へ通ずる1番ドックにたどり着く。

「ここがガレーラカンパニー……」

「ああそうだ。その職人さん仕事を依頼したいんだが」

「ん？ワシか？」

襟を立てた作業服に四角い長つ鼻、こんなキャラクターワンピースでは一人しかいない。1番ドック大工職職長兼CP9「カク」だ。

「ええ、仕事の依頼をしたくてな」

「ほう、なんじゃ？」

「軍艦5隻と海賊船1隻の修理と改装、ガレオン船1隻の改装、そして建造依頼だ」

「こりやまた依頼が多いな。取り敢えずその修理する船を見るとしよう、船を泊めたた場所は？」

「今持っている」

「ん？ワシヤは船を泊めた場所わ聞いているんじゃ」

「私の能力を使って体内にしまっている。見るんだったら出すが場所はあるか？」

「ワハハハ、そうかなら確か5番ドックが空いてるはずじゃ。そこに1隻ずつ出してもらおうか。海に浮かんでいるよりよく見えるわい」

その後、海軍から押収した軍艦5隻とキツネ船の具合を見てもらった結果、損傷は激しいが修理すれば問題なく航海できるとのことだった。ネルソン号に関してはこの前作つたばかりなのに改装してもらおうとすることに気付いて皮肉を言いやがった。

「そうじゃな、6隻分の修理で5000万前後、7隻分の改装で6000万前後で合計1億ベリーくらいじゃな。改装で何を取り替えるかは知らんが何をつけても大抵6000万程度じゃ」

「そうか。改装してもらいたいものはあとで紙にして渡す」

「そうしてくれると楽じゃわい。それで、建造の依頼はどうするんじゃ？カタログから選べるぞ？」

「大丈夫だ、既に設計図がある」

「おおそうだったか。その設計図を見せてくれ」

「すまないがそれはできない。君とはまだ会ったばかりこの設計図の船は私の運命を左右する大事なものこの会社の社長にだけ見せるつもりだ」

「アイスバーグさんに？そのつもりならいいんじゃないが」

「アイスバーグさんは今どこに？」

「アイスバーグさんなら——」

「ンマー。呼んだか？」

突如として現れた男こそこの街の市長でありガレーラカンパニーの社長「アイスバーグ」だ。

「アイスバーグさん!?今日はカーニバルの町サン・ファルドの市長と会談とか色々あったはずじゃ？」

「面倒臭いからキャンセルしてきた」

漫画通りの人物像だな……。

「はじめましてアイスバーグさん」

「ああ、はじめましてえーっと」

「史上最悪の偽善者クルシユ・ジルベールです、アイスバーグさん」

「ンマー。流石だなカリファ」

「恐れ入ります!!」

「それでお前さんは俺にだけその設計図を見せたい訳だな」

「そうだ。これはある人が発明したもの、それを私が許可なく広めたりするのは間違えだと思ってな」

「そうか、それならお前ら少し離れてろ」

「はっ」

「んで、その設計図とやらは？」

「これだ」

もらった設計図を両方ともアイスバーグにわたす。その設計図を見ているとアイスバーグの顔はみるみる変わっていった。

「お前さんこれどこで手に入れた」

「教えられない。その高圧水管ボイラーというものを動力源として船を動かすのがその巡洋戦艦だ」

「こんなものを発明するやつがいるのか……」

「で、どうなんだ。この設計図通りに君達はこの船を建造できるか？」

「できるかもしれない。いや、建造しよう。こんな船見たことも聞いたこともない技術者としての血が騒ぐってもんだ」

「建造費は？」

「ンマー、ざっと70億ベリーあれば間違いなく足りる」

「建造にはどのくらいかかる？」

「こんな船作ったこともないから正確にはわからねえが、おおよそ3年か4年つてところだろうか」

「分かった。今手持ちが5億ベリーしかない、取り敢えずきつきカクに依頼した修理だけ依頼しよう。改装に関してはそのタービンに乗せる予定だったからな」

「ンマー。これをあの船に乗せるには無理があるぞ」

「そうなのか？」

「ああ、無理やり乗せたとしても船が沈んでしまうだろうな。だったらあの船を俺らが買い取ってやろう」

「本当か!？」

「ああ。船としては修理しねえと使えねえが部品はまだ生きてる。使えるところだけとつてもまあまあ金の金はなるからな」

「そうか、売ろう。だいたいいくら位になりようだ？」

「6隻で70億ベリーくらいだな」

「は？」

彼の言った金額には今まで黙っていたニコラも素っ頓狂な返事をしてしまった。

もしかしてこいつ……。

「もしかしてアイスバーグさん……」

「そうだ、こんな設計図見せられて金がないから作るのを待ってくれなんて技術者泣かせだ」

作りたくてワクワクしてるから無償で引き受けるつもりだっ！

「こいつはガレーラカンパニー設立以来過去最大で最高の依頼だ。ウォーターセブンの職人の名においてドンと作ってやろう！この設計図預かるぞ」

「いいですが、1つ条件が」

「なんだね？」

「この設計図の複製の製造を禁止します。この設計図は貴方がフランキーに渡したものと同じくらい大切に扱ってくれ」

「なっ、お前それをどこでっ！」

「私は政府の役人でもオハラの考古学者でもない、ただの民衆の守り手だ。共に秘密を持つ者同士仲良くしたいんだ」

「そういうことか、お前自身も気に入った。必ずや守り通し建造してみせよう！」

「よろしく頼む、君たちが買い取ってくれる船たちはどこに停泊させておけばいい？」

「ンマー。そうだな、西海岸に停泊させといてくれ」

「分かった。では」

カクとカリファの横を通りすぎる際少し脅してから5番ドックを出ていった。脅した内容は簡単だ。新造艦に関して詮索したり設計図を複製しようとするな、さもなければ政府機関の殆どを更地にする脅しといた。政府のためにすべてを犠牲する彼らでもその政府自体を人質に取られたら何もできまい。



「ブルーノ、俺たちの正体見破ったやつがいる」

「それは本当かルツチ。任務に支障はあるのか？」

ウオーターセブン裏町に存在する宿の一室に潜入中のCP9たちは集まっていた。この宿表向きは普通の宿だが本当の顔はウオーターセブンでのCP9の拠点なのだ。

「支障はない。ジルベールはこちらが手を出さなければ何もしてこないよ」

「なら、無理に手を出すわけにはいかないわね」

「ジルベール？ マリージョアを襲撃したあのジルベールか？」

「そのジルベールね」

「ワシとカリファが奴を間近で見たがあれは化け物じゃな。上手く抑えてるようじゃが近付けばよう分かる」

「奴がアイスバーグに渡した設計図が気になるが、我々の任務はアイスバーグが持つプルトンの設計図の奪取だ。ジルベールはノータツチだ」

「了解」

09話 布石

ウォーターセブンに訪れてから1年がたった。時間が経つのが早すぎ？うるせえ。

この1年で変わったことは大きく分けて3つだろう。

まず1つ目は、王下七武海に加入した。多分この勧誘はエースに送られた勧誘が私に送られてきたのだろう。私はそれを承諾して七武海に仲間入りした、七武海に加入すれば海軍と手を結びながらも色々とすることが出来るから加入するしかない。

2つ目は民間軍事会社を設立したことだろう。私1人では手を差し伸べられる数が限られてくる、それを解消するために設立したのが民間軍事会社。Paradise Outside of Heaven。通称POHだ。

隊員は私の思想に賛同してくれた元軍人達で構成され、今はウォーターセブンを拠点に海賊の討伐と内戦中の国への人道支援を行っている。

3つ目はPOHの活動資金調達目的で貿易会社を始めたことだな。改装を行わなかったおかげで残った資金を元手に起業して貿易船の護衛にPOHを付ければ海賊も襲ってこないし来られても対処できる。

企業名は「前グランドライン会社」略称はFGLだ。取り揃える品は各島々の特産品で武器や違法物は取り扱っていない。まだまだ安定はしないが今のところは上手く行っている。

FGLは現状とても上手く行っている。各島々は基本、グランドラインの特性のせいで交流が難しい。そんな中、島と島を安全に物のやり取りができ、かつ特産品を使った島のPRもできる。FGLと契約してくれる店は起業時の予想より多かった。中継貿易は儲かる、これは歴史が教えてくれる。

「ソマー。最近うまく行っているようだな」

PO4・FGL共同本社近くのカフェでコーヒーを嗜んでいるとア

イスバーグさんが話しかけてきた。なぜか胸ポケットにはヤモリが入っている。

「ああ、アイスバーグさん。このまま順調に行ってくれればその資金で多くの人たちを救える、だから頑張っているのだよ」

「世界の海賊共がみな、君のような海賊ならいいのだがな」

「ここに来たときから言ってるいるが私は海賊になった覚えはない」

「ンマー、そうだったな」

「そういえば戦艦の建造は順調か？」

「概ね順調だ。あと半年もすれば進水できるだろう」

「そこまでいったのか」

「ンマー、ガレーラカンパニー一番ドックの技術とウオーターセブンの金属加工技術をフル動員したからな」

「流石だな」

「君のFGLも貢献しているんだぞ。FGLが安定して鉄鋼を輸入しできてくれるから材料不足に陥らずやっていけてるんだ」

「それは良かった。あ、そうだアイスバーグさんに伝えておきたいことがあったんだ」

「なんだ？」

「私は少しの間ウオーターセブンを離れる」

「……………今は少しよしたほうがいい。FGLはまだ起業して半年しか経っていない新店だ、今は順調かもしれないがこれからどうなるかわからない。そんな時期に社長がいなくなるのは不味い。それに——」

「それに？」

「急速に力を付けてるルーキーがいる」

「私がルーキーに負けるとでも？」

「ンマーそうは思わんが……………」

「そのルーキーの名前は？」

「スピード海賊団船長火拳のエースだ」

！もうエースが海に出たか。ルフィの兄にして白ひげ海賊団二番隊長になった海賊王の息子。それが彼、ポートガス・D・エースだ。「ルーキーながらロギアの能力を持っているそうだ。ンマー、君が七

武海に入らなければ彼が七武海に勧誘されていたかもしれない」

その通りです。

「それほどか。だが、まあ行かないわけにもいかないんだ」

「どこへ行くんだ？」

「ドラム王国だ」

「ドラム王国？1年前に君が王を追放させた？」

「ああそのドラム王国だ」

海軍本部を出たときに第一目標にしていたドラム王国はPOHの最初の獲物になってもらった。

ワポルはPOHがドラム島に橋頭堡を築き上げたら勝てる見込みなしとそそくさと国を捨てていった。悪政から解放されたドラム島は市民からなる国民軍とPOHで守られ、ワポルによって追放された医者 of 帰郷を呼びかけている。

「ドラム島を任せている現地人のドルトンという男から連絡が来てるな、何でも国を1から作り直すそうだ。その象徴として式典をやるらしいがそれに呼ばれたのだ」

「ンマー、式典に参加するだけなら大丈夫だな。だが、ドラム島まで行くくらいなら俺に言わなくていいだろう。なにか長くなる予定があるんだな」

「最近、アラバスタがきな臭くなってきた。あそこが荒れるとFGLの商売もお手上げになってくる。なにせお得意さまだからな」

新聞で知ったアラバスタのユバでの大干ばつ。この裏にはアラバスタを乗っ取るうとするクロコダイルの陰謀があるのだが、この陰謀のせいでアラバスタで内戦が起こる。

1年後にはコーザがユバで反乱軍を結成する。それまでにできるだけのことはやって少しでも無関係な国民が悲惨な目に合わないようしなければならぬ。

「ンマー。ネルソン号なら改修終わってるぞ」

「なら久しぶりにネルソンで出港しよう。性能はどれくらい向上した？」

「兵装を少し減らしたがそれに見合う、いやそれ以上のスピードを手

に入れた。ンマー、建造中の戦艦に比べりゃあ劣るが、まああれと比べたらすべての船がナメクジになっちまう」

「そうじゃなきゃ困ってしまうよ」

「いつ出るんだ？」

「明後日には出港しようと思う」

「そうか、ネルソン号は中央港に停泊させておく」

「中央港だな。改めて言うが改修してくれてありがとう。アイスバーグさん、このコーヒーは美味いから飲んでいきな」

「コーヒーを飲みきり、2人分の代金を置いては席を立つ。」

「ンマー、ありがとういたたくよ」

片手を上げて相槌を取り、共同本社の扉を開ける。社内は大賑わいで、電伝虫が鳴り響きFGL社員が対応したり窓口対応をしたりと忙しく貿易事務に追われている。

その一方で黒いマスクで顔を隠しているPOH隊員は談笑しながらホールを歩いている。普段、殺伐とした戦場にいる彼らは本拠地でくらい休養できるようなウォーターセブンにいる間は休みにしているに、ほぼ毎日あやまって本社にやってくる。

「ボス！お疲れさまですー」

談笑してたPOH隊員が私のことに気が付いて歩みを止めて敬礼してくる。それに続いて気が付いたPOH隊員やFGL社員が挨拶をしてくる。

「お疲れさまです、社長。レッドティー島とグリーンティー島の契約延長の書類に目を通していただきたいのですが」

「分かった、ニコラに渡しておいてくれ。後で見よう」

「ありがとうございます」

「お疲れ様です、ボス！オリーブソープ島の内戦について報告したいことがあります」

「そちらも分かった。私の部屋で報告を聞く、先に向かってくれ」

「はっー！」

FGLはPOHの補給と資金を、POHはFGLが安全に貿易できるように護衛する。この連携によってお互い成り立っているおかげで

上手くいつてるが、その分私の負担が大きいのがつらい。社員も隊員も頑張っているから私も頑張るべきなんだろうが、流石にキツイ。

キツイが3年後はもっとキツくなる。時代が大きく動き出す……いや、もう動き始めている。時代に飲み込まれる訳には行かない。

「FGL社員、POH隊員、両名に告ぐ！心して聞け!!」

「はっ!!」

ホールにいた社員・隊員全員が今までやってきた行為を辞め、席を立ち社員は直立不動で隊員は敬礼のポーズで私を見る。その場にした、客人たちは突然自分たちが突き放されたことについていけず状況を飲み込めていない様子だ。

「今から3年後、時代は大きく動き出す。我々はこれから時代^{世代}と戦うことになるだろう！時代に排除されるかそれとも、私達に時代が協調するか。それは善悪も勝ち負けもない、孤独な戦いになる」

「これからの3年間は時代への戦争準備期間だ！この3年間で我々がどこまで成長できるか、どこまで拡大できるか、それが我々の運命を左右する。我々が時代に飲み込まれれば海軍に救えぬ民たちを誰が救う！天竜人どもに虐げられる民たちを誰が救う！」

「我々は負けるわけにはいかないのだ。各員一層奮励努力せよ！全ては民衆のためにつ!!」

「「全ては民衆のためにつ!!」」

「終わりだ、作業に戻れ」

この3年間の重要性が彼らにも伝わっただろうか。POHが最も必要になってしまうのは頂上戦争後、白ひげ亡き後だ。白ひげ海賊団の縄張りは戦後は海賊に襲われて悲惨なことになる。

そこに手を差し伸べられるか、その手を離すことなく外敵から守り通せれるかが更に重要になってくる。

私自身も更に強くならなければ。彼の能力は強い、強すぎる。だからこそ彼の能力を完全に掌握して特性を最大限引き出せれるようにしなくては。さもないと、守れるはずの者を失わなければならなくなる。

剣の腕も銃の腕も海軍で訓練して身につけた程度だ。いくら強力

な武器を持っていても使いこなさなければ意味がない。特にこのワ
ンピース世界じゃあ銃弾を避けたり、鉄をいともたやすく斬るのが普
通なんだ。

『正義なき力が無力であるのと同時に 力なき正義もまた無力』

昔、父親に進められて読んで読んだ漫画にそんなセリフがあったな。まさ
にその通りだな。そうだ、せっかく七武海になったんだ。鷹の目ジュ
ラキュール・ミホーク”に剣の教えでも乞おうか。

そんなことを考えながら社内を歩いていけば、“社長室” “司令室
”と書かれたプレートがハメられたドアの前に来ていた。

ドアの向こうには4人の気配、ドアノブを回してみればさつき会っ
た隊員たちとニコラが書類を手に出迎えてくれた。

「ジルベールさん、ご苦労さまです♪いらして早速で申し訳ありませ
んが仕事が溜まってきております。まずは彼らのオリーブソープ島
に関する報告に目を通してはくれませんか？」

「ああ、では諸君よろしく頼む」

「はっ！」

こうして私達は地道に救いの手を求める人々に手を差し伸べてい
く。それが私ができる唯一の事柄なんだから。

10話 アラバスタ内乱への布石

「安いよ！安いよ！」

「水の都ウォーターセブンの塩いらんかね！アラバスタの岩塩とは全くの別物！たかが塩だと高をくくってちゃあ、いけねえよ！」

「おう、その兄さん！うちの店見ていかねえか！」

「今朝採れたばかりの新鮮な魚たちだよ」

「いい匂いの香水があるよ！そのお嬢さん！試してみるかい！」

アラバスタ王国の主要港である「ナノハナ」は活気あふれる街だ。道の両側で売店が開き、客を集めている。掛け声が止まることはなく人が行き合い、笑顔で溢れている。

しかし、笑顔の影には干ばつにより故郷を去らなければいけなくなった者たちの暗い顔がある。彼らの顔を見るまでは原作を変えないうような最低限の支援で人々を守り、ルフィたちに解決してもらおうと思っていたがそれでは駄目だ。例えば、B・Wとクロコダイルと戦争になったとしても市民を守らなければならない。彼らが苦しむ姿は見るに堪えない。

「お待ちしていました。元帥殿」

ネルソン号から降りるとウォーターセブンにいた黒いPOH隊員ではなく、砂漠迷彩のPOH隊員が敬礼で出迎えてくれた。この奴らは私のことをなぜか元帥と呼んでくる。ちなみに、ドラム島では司令長官だ。

「出迎え、苦勞。支部へ案内してくれ」

「はっ！」

支部隊員に導かれ市場を横目に歩いていけば市民たちの目と声が能力のよって鮮明に感じてくる。

「あれってクロコダイル様と同じ七武海のクルシュ・ジルベールか？」

「POHの隊員を率いてるシルベールだろうな……」

「じゃあ、あれが史上最悪の偽善者クルシュ・ジルベールか」

「お前さん偽善者派か！おらは断然、串刺し公派だな」

「串刺し公？そりゃあシルベールの異名か？」

「お前さんたち、史上最悪の偽善者しか知らないんけ。ジルベールさんの異名はこの海で最も多いって言われるんだぞオ〜」

「そうなのか、例えばどんなのがあるんだ？」

「史上最悪の偽善者を筆頭に『串刺し公』『救世主』『解放者』『傾国』『小竜公』『ドラク』」

「あんた！ゴミ出しは行ったのかいつ！そんなところで駄弁って!!」

「おっと上さんが来ちゃった、話の途中だったがじゃあなア」

「なんか嵐みたいなやつだったな……」

私にそんな数の異名あったの!?初耳だ……。

「元帥殿、いかがなさいましたか？」

「いや、なんでもない。アラバスタ支部はあの建造物か？」

「はい、あちらになります」

目線の先に見えるのはカーイト・ベイ要塞のようなレンガで作られた城壁を持つ海岸にある要塞だった。

ポールにはPOHの旗が風に煽られ、城壁には砂漠迷彩の隊員たちが巡回している。POHの拠点だと一目でわかるな。

「開門!」

要塞の様子を観察していると門の前まで来ていたようだ。案内隊員が叫べば城門が少しずつ動き始め、開門する。

「気をつけ!!」

Paradise Outside of Heaven

全軍指揮官殿に

「敬礼!!」

直立不動で右手を額に当て敬礼する隊員たちは城門から居城の入り口まで一列に並んでいて壯観だ。

「お待ちしておりました、元帥殿。応接室でアラバスタ王国護衛隊副官『ペル』様がお待ちしております」

「分かった。お前は変わりないか？アラバスタ方面軍総監」

「はっ！変わりありません。元帥殿のご厚意のおかげで部下ともども不自由なく任務に専念できております!」

「そうか、それは良かった」

そんな感じで総監と話しながら部屋に向かっていけばすぐに着いた。総監がドアをノックする。

「元帥殿がいらしました」

ドアを開けるとあのペルがいた。いると分かっているにもかかわらず原作のキャラクターと会うとなると心が躍る。漫画やアニメで見ている通り精悍な顔立ちで人気が出るのもわかる。

「本来はこちらから出向くところをお越しいただき感謝します。私はアラバスタ王国護衛隊副官のペルと申します」

「いやいや、感謝には及びません。我々は我々の正義のもとに活動しているのですから。さあさあお座りください」

「失礼します」

机を間に挟んで座り心地のいい椅子に座り対面する。ペルの目線は私を見定めるような鋭いもので応接室の空気が張り詰める。先の口を開いたのはペルだった。

「クロコダイル殿がアラバスタを乗っ取ろうとしているという情報は本当なのですか?」

「ええ。クロコダイルはB・Wと呼ばれる秘密犯罪会社を運営しており、この会社は徹底した秘密主義でその存在を確認するのは容易ではありません」

「表ではアラバスタの英雄として活躍しながら、裏ではその会社を使ってこの国を内乱を起こし国家を乗っ取ろうとしているのです」

「それらが貴方が考えたクロコダイル殿を陥れるための嘘という可能性は?」

「疑うのは当然です。ですが数カ月後には貴方は我々を信用するでしょう」

「数ヶ月後に何が起これるというのですか!?!」

「反乱を起こすと考えると半年以内に何かしらの反乱を起こす種火となる事件を起こすでしょう。例えば、王に非ぬ疑いをかけるような事件をね」

「……………」

「我々はアラバスタ王国が内乱に陥ろうが滅ぼうが関係ありません」
「！」

「ですが、このサンディ島に住む無関係な者達が苦しむ姿は見逃せません。我々是我々の正義の元、救いの手を求める人々に手を差し伸べるのです」

「……………今はまだ貴方を貴方達を完全に信用はできませんが——
——少しだけ信頼しましょう」

「ええ、それで良いのです。例の書類の承認よろしくおねがいますね？」

「POHの駐屯に関しての書類でしたね。あちらは議会での承認が必要ですからお待ちください」

「気長に待たせていただきますね。では次はPOHの全軍司令長官ではなく、FGLの社長としてお話ししましょう」

「FGLの要望は確かサンドラ河上流の岩石砂漠地帯での開拓及び地下資源開発の許可でしたか」

「その通りです」

「王国のものとして言うのもなんですがあの土地は植物も育たず家畜も飼えず資源なんてなにもない土地ですよ」

「知っております。ですが、我々にはそこが欲しいのです」

「我が国としては未開拓地を開拓してくれるのです。喜んで許可しましょう」

机の端に置いてあった書類にサラツとサインを書いて一枚を渡してくれた。

「こちらがあなた方の控えです」

「——はい、確かに受け取りました」

「それでは本日は結意義な時間をありがとうございました」

そう言つて席を立つペル。私も慌てて席を立ち、彼の対応をする。「いえいえ、ペルさん。私も結意義な時間を過ごせたこと感謝します。最後に念押ししますがクロコダイルに注意を」

「ええ分かっております。クロコダイルにも貴方にもこの国は好きなようにさせません」

彼はそうして部屋を出ていった。

「ふうー」

「お疲れさまです。元帥殿」

「ああ総監。やはりこういった交渉は気を張りすぎて疲れてしまうよ」

「立っていただけの私も少々気が滅入ってしまいました。……元帥殿、質問してもよろしいでしょうか？」

「何だ、言ってみろ」

「なぜ、サンドラ河上流の岩石砂漠地帯の権利を要求したのですか？」

「む、アラバスタ方面軍はFGLからの報告を受けてないのか。これは問題だ、後でしっかり命令しとかないと」

「げ、元帥……？」

「すまない、独り言だ。——理由だったな」

「理由は簡単だ。その地域では金が採れる可能性が高いからだ。それも大量のな」

「金……」

「サンドラ河上流で大量の砂金が採れることがFGLの調査団が報告で分かった。ならその砂金の大元はどこかってことだ。それとこの書類をよく見てみる」

「……………えっ!!あ、大声を出してしまい申し訳ありません！」

「よく読めば分かるがその書類にはFGLが発見開発した資源は永久に我々のものとする」と書かれている。サインする書類をよく読むのは当然というのに彼はそうしなかった」

「これでFGLに固定収入ができ、さらにFGL・POH共にさらなる拡大が可能になるのですね」

「ああ」

アラバスタで金が採掘できるかはFGLを企業する前から考えていた。原作でのアラバスタは古代エジプトをモデルにした国家だと知っていたからな。

そこで調査団をアラバスタに送ってまず砂金が取れる土地がないか調査させたらこの結果だ。

自分の思い通りに、私の小さな手のひらから出ないでいるのは素晴らしい感覚だ。あの瞬間、あの戦争狂もこんな感覚だったのだろう。「総監、アラバスタ方面軍の本部をこの岩石砂漠地帯に移すぞ。この要塞はFGLの支部とする」

「はっ!!」

「まずは岩石砂漠地帯を徹底的に調べて地形の把握、鉱脈の発見、水源の確保を行わせろ。それとFGLとの連携を怠るな。私からも命令しておくが方面軍からも言っておけ」

「はっ!」

「開拓に関してはFGLに開拓部署を作る。そこを通して計画書が渡されるだろう。軍事的面で気になるところがあつたら必ず報告するように」

「了解しました!」

「それと今後のアラバスタ情勢を鑑みてアラバスタ方面軍に新たに人員を送る。そのときに一緒に物資も送る予定だ。必要品目をまとめて報告しておいてくれ」

「ご配慮感謝します!」

「私はアラバスタを散策してからウォーターセブンへ帰還する」

「ならば護衛を——」

「護衛はいらない。総監、汝の特務を遂行せよ。全ては民衆のために!」

「!……はっ!全ては民衆のために」

原作まであと秒読みだ。あと3年、もう3年、3年しかないのだ。まだグランドラインにしか手は伸びていない、ノースブルー北にも、サウスブルー南にも、イーストブルー東にも、ウエストブルー西にもどこにも手は伸びていない。手を差し伸べない

といけない人々は世界各地にいる。

彼らを助けられないでなが民衆のためか。

体をコウモリへと変化させ、窓から外に出る。空からは港に泊まっている船、繁華街が一望でき、遠くにはサンドラ河が見える。

『まずは自らの目で現地を見ないと』

その日、アラバスタでは珍しい日中に飛ぶコウモリの大群が各地で観察された。

◆
「サー・クロコダイル、最近貴方と同じ七武海のジルベールがこの国に手を伸ばしてきているそうよ。私達の計画に気付いたのかしら」

「ふざけたこと言ってるんじゃないよ、ミス・オールサンデー。なんのために徹底して秘密主義をやっているとってるんだ」

「あら、そうかしら。彼、POH・FGL2つの組織を束ねてどちらも勢力を急拡大させた手腕を持つ男よ？情報網も伊達じゃないと思うけど」

「バレてたら消すだけだ」

「そう。私も彼に計画を邪魔されるのは不本意だからそれには賛成ね」

「それよりミリオンズの数が減ってると聞くと聞くが」

「それもPOHのせいね。内戦中の国にミリオンズを送って略奪するのは良かったけどそこにPOHがいたらしいわ。それでやられちゃったってわけ」

「クルシュ・ジルベールか……目障りな奴だ」

11話 思い立ったが吉日

「ニコラ、ちよつくらワノ国行ってくる」

「はい……………つてえ!？」

アラバスタで色々やってきてから数ヶ月たったある日、私はニコラに唐突にそう言った。

「ジルベールさん! な、なんでワノ国になんかに!」

「ワノ国で手に入れられる品々に少し興味がある。それとカイドウと戦ったと箔をつけたいからだな」

「そ、そんな理由で……………」

「それ以外にもちゃんとした理由はある。ワノ国の民たちは將軍というものに虐げられているらしい。虐げられているなら解放せねばな」

「それはそうですね……………ワノ国は百獣海賊団の本拠地ですよ? いくらなんでも無茶が……………それにPOHはアラバスタの金で拡大できたといえ5000人。それに対して百獣海賊団は2万人の兵力を持っていると聞きますよ!？」

「POHを連れて行く気はない。そもそも連れていけないだろう。オリーブソープ島の内戦もラズライト島の紛争も収まってない、アラバスタでもB・Wの動きが怪しい。どこからも戦力は抜くことはできない」

「でしたらなおさら!？」

「いくら止めても私はワノ国に行くぞ。ガレーラカンパニーに電伝虫を繋げてくれ」

「もう! 必ず戻ってきてくださいね!」

頬を膨らませながら電伝虫を渡してきたニコラ。 “かわいい” それしか言葉が見つからない。

『ンマー、ジルベールどうした』

受話器の向こうからは少し怠そうなアイスバーグの声がしてきた。彼の声の後ろからはなんか怒号が聞こえるし何かあったのだろう。

「アイスバーグさんか、数日前に完成したって言っていたアレを港に出してくれ。個人的に航海する」

『分かった。今度はどこに行くんだ？またアラバスタか？それともアレを使うってことはグランドラインを出るのか？』

「いや、ワノ国に行く」

『！何をワノ国でしかすかは聞かないが俺の師匠がよく言っていたことを君に伝えよう。男ならドンとやれ!!!』

「私が男なのか女なのかは置いといてありがとう。新聞を楽しみに待っていてくれ、結果がどうなろうと新聞の一面は私になるだろうか
らな」

『それは楽しみに待っているよ。もう少し君と話していたいが客人が来てしまったようだ。ではな』

「ああではな」

『ガチャリ』

受話器を置けば電伝虫は目を閉じて寝たように動かない。こんなヘンテコな生き物がいることも最近は普通になってしまったな。前世じゃありえない生物だっというのに。

「ジルベールさん、いつ出発するんですか？」

「そうだな、船の準備が出来たらすぐにも出港しよう」

「本当に生きて帰ってきてくださいよ？カイドウはあの白ひげと並ぶ四皇の1人なんですから！」

「もちろんだ」



「ウォーターセブンを出て7日で赤い港^{レッドポート}か、流石だな」

乗っている船はネルソン号ではない。巡洋戦艦を作る過程で生まれた試作艦である装甲巡洋艦「ヤネール」だ。

目標と比べたら性能はお世辞にも良いものとは言えないがこの世界では十分な性能だ。速度で言えば、帆船が自転車ならばヤネールは車だ。射程で言えば海賊が使う大砲は100m以上近づかなければ当たりもしなければ効果も期待できない。しかし、ヤネールの武装は10kmで有効射程に入る。

このヤネールを基準に数を揃えて艦隊を組むのも悪くない。そうすれば海戦で負けることはないだろう。

「何だあの船……いや、船なのか？それになんだあの3本の煙突は……」

「マストも外輪もないのにどうやって進んでいるんだ。そもそもあれはどここの船だ」

「あの船尾の旗は……クルシユ・ジルベールだ！POHの剣と銃の枝の旗でもなくFGLの天秤に金貨と木箱がのった旗でもない、シンブルなあの旗！クルシユ・ジルベールの自身の旗だっ!!」

「な、なんであいつが再び！またマリージョアを襲撃するっていうのか！」

「で、でも彼は七武海よ！なんで政府側の彼が政府を襲うのよ！」

「それもそうだが……」

久しぶりのレッドポートだ。だが、今回はただの通り道だ。さっさと艦をしまつてレッドラインを飛び越えてしまおう。

「船が消えた!!」

一々いい反応をしないでくれ笑ってしまう。

「あ、あいつだ……串刺し公ジルベール……」

「史上最悪の偽善者クルシユ・ジルベール……」

「そんなに警戒しないでほしい。レッドポースの方々、私はなにも暴れに来たわけではないすぐに居なくなるさ」

体をコウモリへ変化させ空へ飛び立つ。市民たちは口を開け固まっていたがそんなのお構えなしに赤い土の大^{レッド}陸^{ライン}を登っていく。

登りきった見覚えのある人工林と遠くのパンゲア城だ。今回はマリージョアを荒らすことが目的ではないためスルーして足早に新世界側へ飛ぶ。

これが私が新世界に行くために選んだルートだ。魚人島を通るルートも考えたが艦を体内にしまえることを考えれば魚人島を通るよりマリージョアを横断したほうが安全で早い。彼の能力あつての強硬手段だ。

新世界側の岸にたどり着ければコウモリ化を解いて人型に戻る。

今度は崖から飛び降りて全身で重力と空気抵抗を感じる。前世でバンジージャンプが好きだった私にとってこれほど楽しいバンジージャンプはない。

流石に重力に任せて地上に落ちればレッドポートに多大なる被害を与えかねない、ある程度地面と近くなったら霧化して衝撃を無くした。

「ふう楽しかった」

「あ、あんた今レッドラインから落ちてこなかったか……？それに一瞬霧みたい……」

「なにいつてるんだおっさん、昼間から飲みすぎだ」

「えっ？……えっ？」

パニック状態に陥っているおっさんを横目に港に向かってヤネールを出してすぐに出港する。港の周りにいた市民たち皆、あのおっさんのようにパニック状態になっていたな。

「さてここからどうするか、ワノ国への”永久指針《エターナルポース》なんて持っていないからな」

海軍でもらえた永久指針は世界政府加盟国のものだけだったからなア。どうやってワノ国に向かうか。

「取り敢えず、ドレスローザに向かうか」

ルフィたちがワノ国に行く前にドレスローザを通ったように取り敢えずドレスローザに行くことにした。ドレスローザにいるドフラミンゴはカイドウと繋がっているし、もしかしたらワノ国への永久指針を持っているかもしれない。

◆ Loading

艦をドレスローザの永久指針に合わせて進み始めて丸2日、遠方に船が見えた。

「あれは………百獣海賊団の船!？」

あの特徴的な旗と船首間違いない。あの船に永久指針があれば問題は解決だ。そうなれば襲うしかない。

コウモリに変化して敵船に乗船する。突然現れたコウモリにクルーたちは慌てふためいていたがそんなのお構えなしに人型に戻り、即座に1人を腕で突き刺す。

「さあカイドウ、勝負だ。」

クルーたちは剣を構え、銃口を向け、機会を伺う。そんなものは関係ない、目にも留まらぬ速さでクルーたちをミンチにしていく。

手がクルーの肩に当たればクルーは肩から斜めに引き裂かれ、横っ腹に当たれば上半身と下半身に引き裂かれる。

「とつたー！」

1人のクルーが剣を振りかざして私の頭を真つ二つにする。頭は綺麗に両断され頭の中が文字通り見えた。

「へっへっへっ、馬鹿が！百獣海賊団に挑む度胸だけは褒めてやry
——」

次の瞬間、そのクルーは頭がかち割れた化け物に首を締められていた。

「頭を両断すれば死ぬと思ったか？」

「ウグッ！——は、離せ！」

「敵に離せと言われて離すやつがどこにいる？」

「ばッ…ば」

「ばッ化物め！」

「！」

「「そうか貴様もそうなのか小僧」

「「出来損ないのくだらない生きものめ」

「ほざくな！世界政府のオモチャめ！！世界政府の犬になり下がった貴様に海賊としての」

「五月繩い！！」

真つ二つにされた頭は元通りになり、腕が巨大な狗の頭部に変化する。禍々しい狗、サメの歯のように鋭く大きく、今にも喰らいつきそうなほどヨダレを垂らし、頭部全体にある無数の目玉。まさに魔犬。「お前らは犬のエサだ」

狗はまず首を絞めていた男をすぐさま飲み込み、一人二人と喰らっ

ていく。船上は悲鳴と肉が千切れる音と骨が砕ける音が音楽のよう
に鳴り続く。

狗が10人喰らった頃だろうか、クルーたちは抵抗するのをやめた
だしを待つだけになった。目は光を無くし絶望した顔つきで天を仰
ぐ。その姿はあまりにも哀れだった。

「お前ら、百獣海賊団をやめろ」

「……………」

「やめてFGLに入れ。今ちようどアラバスタの鉱山で人が足らん
だ」

「……………」

「はア……………『魅了の魔眼』」

「アアつ、アアアつ……………」

「アうア、あ〃あオ……………」

私の瞳に生き残ったクルーたちの目が合わせられるとクルーたち
の瞳に私が映り込み、彼らの中で私への思いが溢れてくる。男たちは
私にカリスマ性的感情が、女たちは私に最上の恋愛感情がまるで噴火
時のマグマのように溢れてくる。

「マストをPOHの物に変え、男どもはアラバスタの鉱山で働け、女ど
もはウォーターセブンで事務を行え」

「『了解しましたア』」

「ワノ国への永久指針はあるか？」

「こちらに……………」

クルーが持ってきたのはワノ国と刻まれた永久指針。これで直接、
ワノ国に乗り込むことができる。

「お前らは魚人島を通ってアラバスタに向かえ。そこで男どもをおろ
して、女どもはウォーターセブンだ。船はガレーラカンパニーに売
れ」

「『はっ！』」

ヤネールに戻り海賊船が新世界を逆走していくのを見守り、ヤネー
ルをドレスローザからワノ国へと進路を変える。

「カイドウ待っているよ」

艦は帆船とは比べ物にならないスピードでワノ国へと向かっていく。パンクハザード、ドレスローザ、ゾウ、ホールケーキアイランドとルフィたちが4年後激戦を行う島々を横目に流しながら進んでいく。

天気が急に悪くなり潮の流れも激しくなってきた、それに遠くには巨大な滝が見える。ついにワノ国入国寸前まで来たことを実感する。本来ならワノ国に許可を得ず入国するには鯉を使ってあの滝を登るしか手段がない。しかし、私なら――。

艦を取り込みコウモリ化して滝を登って行く。なんと便利な能力か。

レッドラインとは違う水の壁、透き通った淡水は巨大な鯉の姿を鮮明に見せ、水飛沫がその勢いを警告してくる。

鯉が滝を登りきり空に舞ったと同時に滝を登りきり、ワノ国のその姿を見た。

濁流の海を飛び、潮が穏やかになったところで艦を出す。

「さあワノ国よ！黒船来航だ！」

12話 鬼ヶ島

約30年前は美しい自然で、美しい町で、人々が笑い過ぎていた。しかし、カイドウと將軍オロチのせいで自然は失われ、町は滅び、人々に本当の笑顔は失われた。

4年後にはルフィたちがこの国を解放し、カイドウを追い出すだろう。それを待てばこの国は救われる。しかし、それではこの4年間で命を落とす者たちが救われない。

「それにしてもすごい波の高さだ」

ワノ国近海に着いてから艦の行き先はワノ国本島ではなく、鬼ヶ島に定まっている。登ってきた滝を背に本島をクルツと半周すれば鬼ヶ島は見えた。

しかし、漫画でもアニメでも強調されていた恐ろしいほど高い波に呆気を取られた。艦が沈むほどではないがそれでも高い。それに追い打ちをかけるように日が暮れ、月光も厚い雷雲によつて遮られ暗い。

鬼ヶ島の炎が灯台の役割を担っていると云っても過言ではない。炎がなければどこに鬼ヶ島があるかも分からなかっただろう。

「鬼ヶ島燃え過ぎではないか？」

鬼ヶ島の各地から火柱が上がって、爆発音もする。仲間内で喧嘩でもしてるんだらうか。

そう思っているとあの雷雲が嘘だったかのように消え去り、満月が海を照らし始めた。今まで上がっていた火柱も上がらなくなつたし、笑い声が聞こえる。

『わはははは！』

『だはははは！』

『アハハハ！』

喧嘩をやめて宴でも始めたかのような声だ。百獣海賊団なら喧嘩して宴をするなんて普通に有り得そうだ。

さつさと鬼ヶ島に上陸して笑い声の正体を見てやろう。カイドウだったら即座に殴りかかろう。うん、それがいいな。



「惜しいな。こんなに強くて馬が合うのに!!」

「コレさえ取れたらいつか必ず!!僕だつて海へ!!」

「ねーねー海外はどうだ!?若い奴らどんどん出て来て来ないか!？」

「若いのか? そうだな。『ジルベール』 っつてやつと 『キャベン何とか』
…っつてのは話題だな…」

「俺は別格として…今、各海でヤベエ奴らが暴れてるらしいんだ。南
の『キッド』 だろ、北の『ロー』 西の『ベツジ』 …」
♪」

「だが一番手強いのは数年後に出港してくる俺の弟だ!!」

「きつと強大な存在になる…!!」

「キミの話、何回弟が出てくるんだ?」

「何回でも聞きやあいだろうが!! だははは!!」

「いたい、いたい」

あれはエースとヤマトじゃないか! あの二人が酒を酌み交わして
いるっつてことは回想シーンのあれだ! つまり、ここにカイドウはいな
いっ!

ワノ国まで来た意味がない——だが、あの二人と話してみたい。
一ワンピースファンとして大人気キャラ2人と会話してみたい。

「そこの二人、カイドウはどこかわかるか?」

「!」

二人とも私が話しかけた瞬間、酒を置いて距離を開けた。凄まじい
瞬発力だな。

「まあそう警戒しないでくれ、私はただカイドウと戦いたいだけだ」

「テメエはジルベールっ!」

「え!?! この人がキミが言つてたジルベール!?!」

「私のことを知ってくれているなんて嬉しいではないか、火拳のエー
ス」

「ジルベール、エースにも言つたが父達は遠征中だ!! 今この島には幹

部の一人もいない」

「この暴れ具合からそうだろうな。火拳、君がやったんだろう?」

「そうだけだよオ、それがテメエになにか関係あるか!火拳!」

エースの右手から巨大な炎の拳が飛び出し、私を燃やす。体を焼き続け、体は塵となる。

「へっ!七武海つてのもこの程度か」

「エ、エース!後ろ!」

「あ?」

「先に手を出したのは君だからな」

塵から影へ、影から影へと移り、エースの背後で影から飛び出る。そしてそのまま覇気をまとってエースを殴り飛ばす。

「どうした赤いの立てよ」

「一発殴られてハイお終いつて訳にはいかないんだよ。小僧」

エースは瓦礫から起き上がり、ヤマトは私の姿を見て驚いている。

「お前……何のつもりだ。何のつもりだ、それは!!」

「子供!」

私の姿はクルシュー・ジルベールの姿から捨てたエドワード・アンナの姿に戻す。姿形など何の意味もなくなったが、エースと戦うならこの世界で最初の姿で戦いたい。

「あの姿もジルベールという名前も全ては意味を持たない。強いて言うならこの姿が唯一の意味のある姿だろう」

「何ごちやごちや行つてやがる!火銃!」

「銃対決でもしたいのか?」

炎の銃弾を避けて正面から受けながらジャツカルを取り出す。

「お前もロギアか!」

「ロギアではない」

引き金を引けば銃とは思えない鈍い音と共に銃弾がエースに撃ち込まれる。

「ガハア!………な、なぜ銃が俺に効く!」

「高純度の海楼石を溶かして作った13mm炸裂徹鋼弾だ。こいつを喰らって平気な能力者はいない」

エースは撃たれた脇腹を押さえ苦しそうにしている。そりやあそ
うだろう、脇腹をえぐられているんだからそうなるに決まっている。

「さあ早く傷を治せ、喧嘩がしたいんだろう小僧?」

「テメエ……!」

エースの全身から炎が上がり始め、脇腹が炎で回復すると私めがけ
て飛び掛かってくる。

「待ってエース!!」

飛び掛かってくるエースを金棒で無理やり止めたヤマト。金棒は
エースの熱で少しだけ溶け始めている。

「この子はキミに敵意を持っていない!キミが攻撃したから攻撃して
いるだけだ!」

「火拳、お前がやめるってんなら何もしない。何の事はない、こんな物
は所詮ガキの喧嘩だ」

「キミも煽るようなこと言わないでくれ!!」

おう、ヤマトに怒られてしまった。それに、エースとも少しだけ戦
えた。素晴らしい1日だ。カイドウとは戦えなかったがワノ国まで
来たかいたがあった。

「す、すまねエ!ジルベール!」

いつも間にか冷静になっていたエースが謝りに来た。挟れていた
脇腹は元通りに治っている。流石、ロギア系能力者。

「何故だが分からないが、お前を倒さないと恐ろしいことになると思
じたんだ。すまねエ」

「恐ろしいことね。私からすればエース、君のほうがよっぽど将来恐
ろしいことを起こしそうだよ」

実際、頂上戦争起こすし程度の低い挑発にのって多くの命によって
救われた命を無駄にするし。

「俺がア?」

「確かにキミなら恐ろしいことかは分からないけど、大事を起こしそ
うだ!」

「大事を起こすのは当然だ!!なんたってあいつには悪いが俺が海賊王
になるからな」

「父の意志を継ぐのか」

「っ！お前どこで！」

「父？」

「エース、君が思っているようなやつではないぞ。あいつは」

おでんの航海日誌とかレイリーの回想とかで見たロジャーの姿は良くも悪くも自由に生きた偉大な男のようだったからな。

「君の父は良くも悪くも自由な男だ。そうだな、ルフィと同じような人間だ」

「ルフィと……っってお前ルフィのこと知ってるのかよ!？」

「知ってるとも。君もダダンもブルージャムも、サボのことも」

「お前はいつたい何者なんだ……？」

「待て待て！キミ達、ぼくを置いてけぼりにしないでくれ!!」

エースとの喧嘩を止めたときののように私たちの間に入り、腕を振りながら話に割り込んでくる。腕を振るたびに、どことは言わないが大きく揺れていて目のいい保養になった。

「ああすまない、この話はこれでおしまいだ。それよりヤマト、カイドウはいつ頃帰ってくる？」

「どうだろう、遠征の時は長い間帰ってこないから最低でも1ヶ月くらいは帰ってこないと思うけど……」

うゝむ。1ヶ月以上ワノ国にいるのは流石に無理だな。ワノ国中の武器工場と囚人採掘場を破壊して、オロチを殺して開国させよう。

しかし、懸念ができる。オロチが死んだことよってカイドウの直接統治が始まるのではないかと考えてしまう。そもそもオロチを殺したら大きく原作が動いてしまうしな。どうしたのかア。

「私はとりあえず、本土に行つて開国するよう言葉で圧力をかけてから帰るよ。今回はカイドウは諦める」

「エース、キミはどうするんだ？」

「オレも一旦、本土に向かう。あの娘たちがちゃんと故郷に戻れたか確認しないといけないからな。あと編笠村の連中に別れを告げねえと」

「そうか……2人ともまたワノ国へ来てくれよな」

「おう！」

「ええ」

「じゃあ……」

おっと、エースが酒瓶を持ち始めたぞ。これは少し悪い予感がしてきた。

「あいつらが戻ってくるまで宴だア!!」

◆ Loading

「結局、スピード海賊団が迎えに来た後も仲間を巻き込んで宴をしたせいでもうすっかり朝じゃないか」

宴を終えてエース達と別れ、ヤネールの甲板でそう呟いた。ヤネールは既に鬼ヶ島から離れ、白舞の刃武港へ向かっている。遠くには薄っすらとスピード海賊団の船が見える。編笠村に向かっているんだろう。

「私はワノ国に来たもう一つの目的を果たしますかあ」

ワノ国との開国……はどうせ無理だろうが前世で言うところのオランダ的なポジションになってやろう。出島的な場所を作らせて被差別民をそこで匿おう。

ヤネールが刃武港に近づくとヤネールの存在に気がついたのか多くの町人が港に出てきた。皆、珍しいものを見つけたかのような顔をしている。中にはスマートタニシを使って連絡を取っている侍もいるな。

「ワノ国本土に無事着いたことだし礼砲を撃つか。外国の港に入るなら礼砲を撃つのが礼儀だしな」

副砲を使って空砲を撃つていく。副砲から黒煙と共に21の爆音が鳴り響いていく。爆音が鳴るたびに町民は怯え、腰を抜かしている。港は大混乱だな。

「じゃあ將軍に親書を渡しに行こうか」

艦載艇を降ろして刃武港に向かおう。艦載艇を降ろしたり服装を整えたり上陸する準備をして艦載艇に乗る頃には刃武港には多くの

役人らしいき侍が集まっている。さらには、何隻かの小舟がヤネールに近づいてきている。

これは自分から將軍に会いに行く手間が省けたかな？

「貴様〜！」

早速、役人が声をかけてきたようだ。

「即刻、ここから立ち去れ!!」

まあそうだろうな。鎖国しているんだ当然の反応だろう。だが、私はペリーだ。鎖国を解いてもらうぞ。

「私はクルシユ・ジルベール！ワノ国との貿易を求めて来た！」

13話 不平等条約

「オロチ將軍殿、返事をお聞かせ願おうか」

花の都オロチ城の一室、謁見の間とでもいうのだろうか豪華な部屋で多くの侍に警戒されながらオロチと対面する。

刃武港で接触してきたワノ国の役人たちは『立ち去れ』としか言わない脳死ばかりだった。親書をオロチに渡してくれと頼んでも拒否し取り付く島もなかった。

そこで鬼ヶ島がエースに襲撃されていることを利用して、鬼ヶ島のようになりたくなければオロチ將軍と会わせろ”と脅してやった。これには流石に役人たちも応じる他なかったようである。

「てめエ、オレがこんなもの認めると思ってたんのか!!」

顔を真っ赤にして親書を投げつけてくるオロチ。その行為には周りの侍も御庭番衆もハラハラしているようで顔が青ざめている。

「認めていただけなのです」

「当たり前だろうがっ！オレがワノ国の開国なんて認めるわけねえだろうが!!」

親書には開国するように伝える旨とPOHを受け入れ、FGL等の貿易会社と貿易を行うことを承認してもらいたい旨が書かれている。

「では、開国はしなくていいので我々がワノ国と貿易することを許可してはいただけませんか？」

「てめエと？」

「ええ、もちろん代金は支払いますよ。そうですねエ……武器よりも皿や扇子といった芸術品が欲しいですね。それと貿易するための租借地が欲しいのですが……」

「まだ貿易を許可するなんて言ってねえぞ！」

どうもオロチは機嫌が悪いようだ。何がそんなに気に食わないんだ。

「てめエはさつきからオレを舐めてるのか!?オレのバックにはカイドウがいry」

「それがどうした!!」

「ひい!!」

「私はもともとカイドウを討ちに來たのだぞ? そんな男にカイドウを脅しに使うか!! 改めて聞こう。私の要求を飲むか?」

「開国はせんとオ!!」

「オロチ様!!」

侍たちに御庭番衆、皆先程より顔を青くして私とオロチの間に入ろうとする。漫画を読んだ限り彼らに忠誠心なんてないと思っていたが、君主を身を挺して護ろうとはするのか。

「ならば、これは飲んでもらいますよ」

影から取り出したのは親書とは違う書状だ。開国を断られた時のために作成しておいた開国に代わる条件、『貿易許可』『租借地』『領事裁判権の承認』『ワノ国側の関税自主権の放棄』『最恵組織待遇の約束』を求めている。要するに不平等条約だ。

領事裁判権までの3条件は被差別民を保護するには必要だ。貿易許可がなければワノ国に合法的に來れないし、租借地がなければ匿われない。そして領事裁判権があればオロチがイチャンモン付けて罪を問うこともできない。残り2つはただのFGLの都合だな。

「これらの条件を私が率いている組織とだけ結べば良いのです。飲んでいただけますよね?」

オロチは眉間にシワを寄せて「くうう」と声にならないうめき声を上げている。そこに御庭番衆隊長である「福ロクジュ」がオロチの耳に何かを告げる。何かを告げられたオロチはシワがなくなり何か閃いたかのような顔で言った。

「そうじゃそうじゃ! この条件はワノ国にとって大きな決断、国中の者から意見を募らなければいけない! 1年後にまた寄港してくれ!! ぐふふふふ!!」

まさに江戸幕府のようなことを言い始めた。別に1年待つてもいいが、もう少し脅迫すれば今締結できそうな雰囲気あるしな……。

「ワノ国はオロチ將軍の独裁と聞いておりましたが? それともワノ国は民の声を聞いて政策を行う民主的国家だとおっしゃりたいのですか?」

「そうじゃー！そのミンシユテキコツカ？とやらじゃー！」

オロチは鎖国しているから知らなかったのか彼の地雷を見事に踏み抜いた。民衆を抑圧し富を奪い、20年近く独裁で地獄を見せ続けてきた男が「民主的」と口にしたことは彼を怒らせた。

彼の影はすぐにオロチの元へ向かい、間に入った家臣たちを無視してオロチを串刺しにする。

「……………!!」

全員が全員、口を開け亡骸となった君主を見つめる。

「今、決断しろ。この条件を飲むか、私に皆殺しにされるか」

その後残された家臣たちはどんな要求も飲む他なく、彼らは全ての要求を受け入れた。弱腰となったワノ国側に対してジルベールはさらなる要求を追加していき完全なる不平等条約が完成した。

この条約によって私の傘下の組織全てはワノ国での寄港が認められ、^{もくろ}潜港を使った安全な入国もできるようになった。またワノ国側は私の傘下の船が寄港した場合、船に食料や石炭、水など船への補給品を無償で提供することとなった。そして租借地は租借期限を99年として白舞の刃武港周辺一帯を租借することとなった。

貿易面ではワノ国側の関税自主権は放棄させ、関税は全ての物において低いものとなっている。ワノ国側の輸出品は金や銀、漆器や陶磁器など芸術品が主だ。逆に我々の輸出品は生糸を筆頭に絹製品、薬品に書物と多岐にわたる。

ウォーターセブンに戻ったらワノ国との貿易いや、新世界での事業拡大を考えてFGLと対を成す「後グランドライン会社」LGLを設立しよう。ワノ国を含む新世界での貿易をLGLに託し、POHの資金をどんどん蓄えていければ良いだろう。

他にも領事裁判権だったり、外国人の扱いだったり色々あるが全て我々が有利になるよう定められている。何回も言うが完全なる不平等条約だ。

『お前がジルベールか？』

そして現在、電伝虫を使って直接カイドウと会話している。目的は唯一つ、宣戦布告だ。

「ええ、そちらこそ百獣のカイドウですね？」

『そうだ。七武海の小僧がオレになんのようだ？それにこの電伝虫はオロチの野郎に渡しておいたやつだが……お前まさか』

「私は今、花の都にいます。なので早く戻って来てください。もうオロチとの要件は終わりあとは貴方との要件だけなのです」

『要件だア？』

「貴方と戦い、そして勝ちワノ国での私の利権を認めてもらいます」

『ウオロロロロロロ!! 言うじゃあねエか！お前みたいにオレに挑んで負けた上にルーキーにその座を奪われた七武海をオレは知ってるぞ!!』

「あんな奴とは一緒にしないでください」

『まあ良いだろう、相手になってやろう。お前ら！さっさと支度を済ませろ!!ワノ国に帰投するぞ!!』

『ワノ国まであと数日はかかるだろう、その間に観光でもしてろ!!ウオロロロロロロ!!』

『ガチャリ』

「ふっ…ふははははははははははは!!」

やっぱり四皇のプレッシャーは凄まじいな、電話越しですら凄まじい圧を感じた。思わず笑い出してしまう程度には圧を感じた。

さて、カイドウが戻ってくるまでにニコラと調節してLGLの設立を急がないとだ。

◆ Loading

「ジルベールさん!?も、もう一度仰ってもらっていいですか!？」

『だから、ワノ国と通商条約を締結したから新しく新世界にて活動をする組織を設立するって言ったんだ』

「ワノ国を開国させたんですか!？」

『いいや、開国にまでは漕ぎ着けなかったが私が率いる組織とだけなら貿易できるように交渉したよ。それとワノ国に租借地も作ったな』
「貴方って人はホントもう……」

なんでこの人は今まで誰もできなかつたことをいともたやすく行うのでしょうか。ワノ国は海軍や世界政府すら手を出せない島国なんですよ？

『新世界で活動する組織を設立するに当たってガレーラカンパニーに新しい造船依頼をしておいてくれ。そうだな……蒸気船を2隻、ガレオン船を15隻くらい建造してもらおうか。ああそれと――』

はあ……またこの人は簡単に物を言いますけどそれだけの船を建造するのにどれだけの費用がかかると思ってますらつしやるのでしょうか。費用だけなら良いのですが、依頼のしすぎで……。

「あの〜ジルベールさん？」

『てな感じでつと、どうした？』

「すつごい言いにくいんですが今ガレーラカンパニーさんのドッグがほぼ全て我社の造船依頼で埋まつてる状態で……」

『そうか、確かについこないだも造船依頼をしたばかりか。今、FGLで所有してる船はいくつだ？』

「蒸気船が6隻、ガレオン船が20隻、スloop船が32隻です」

1年で58隻も船を建造させるなんてこの人はやって見せているんだ愛する人だけど頭がおかしいとしか言いようがないです。

しかも、その方法が “早く完璧に依頼した船数を建造した会社に依頼金とは別に報奨金を出す” なんて無茶苦茶です。お陰様で依頼を出した会社は他の業務を後回しに我社の依頼を達成してくれたから良かったのですが……。

『ワノ国での用事が終わり次第ウォーターセブンに帰還するそれまでにウォーターセブンにどの船でも良いから蒸気船2隻、ガレオン船5隻、クリツパー船を10隻招集しておいてくれ船員は取り敢えずドレスローザに集合させてくれ。あとで船を移動させる』

「はい！……それでジルベールさんはいつ頃お戻りに？」

『それがカイドウがちょうど遠征中でいないようだな、カイドウが戻ってくるまで数週間あるらしいからそれまでワノ国の租借地で色々やっておく。まあ2ヶ月後には戻れるだろう』

2ヶ月後……。

『そんな落ち込むな、帰ったら存分に甘えさせてやるから』

「?!?!もしかして声に出してました!?!」

『そんなことはないけど、なんかそんな気がしたからね。んじやあそろそろ切るよ、愛してる』

『ガチャリ』

顔が一気に赤くなっていくのを感じてしまう。なんであの人は突然あんなことを言うかなあ。私だって言いたいのに……。

『コンコンコン』

「副社長、入室してもよろしいでしょうか?」

「あ、えー!はい!」

「失礼します……ってそんなに顔を赤らめてどうされたのですか?」

「いやいや!!なんでもないから!?!そ、それでどうしたのですか?なにか問題が?」

「はい。以前から社長が懸念を示していたのですがアラバスタ王国でジェルマ王国の商船が多く見られるようになりました。それに共鳴するかのようにならぬ。B・Wとの抗争が激しさを増してきました。増援を送るべきと考えておりますがいかがなさいませうでしょうか?」

「そうですね……」

B・Wはおおよそ2千名程の一大犯罪組織と報告されています。それに対して現在アラバスタ支部には全体の25%、1250人もの人員が割かれています。数で負けていますがこれ以上の人員を動かすことはできません、強力な兵器類を優先的に送ることしかできないでしょう。

ジルベールさんが以前、仰っていた「戦いは数だよ兄貴!!」という考えには賛成ですが、仕方ありません。

「これ以上、アラバスタに送れる人員はいません。ですから、強力な兵器をなるべく優先して配置するようにしてください」

「わかりました!・POHにもそう伝達いたします!!失礼しました!」

このやり取りの数日後、ナノハナで国王の名のもとにダンスパウ

ダーが輸入されていたことが発見された。